

FAR会 設立10周年記念誌



*Fellowship for the Advancement
of Radiology*

FAR会 10周年記念事業世話人会

FAR会設立10周年記念誌

—総目次—

ごあいさつ	(1)
FAR会 会長 橋本 宏	
公益社団法人として、公益の増進と健康社会の実現のために	(2)
日本放射線技術学会 代表理事 真田 茂	
FAR会 設立10周年記念事業に寄せて	(3)
FAR会 副会長 山田 勝彦	
FAR会 「シンボルマーク」の制定	(4)
第一章 FAR会10年の歩み	(5)
第二章 この10年間、心に残る想い出	(15)
第三章 FAR会10年間の記録	(39)
(付1) FAR会10周年記念事業協賛者ご芳名	(58)
(付2) FAR会10周年記念協賛広告	(59)
10周年の記念事業を終えて(御礼)	(60)
FAR会 総務委員長 山 哲男	

ご あ い さ つ

FAR会 会長 橋本 宏



平成 13 年 (2001) 4月 5 日 神戸国際会議場において産声をあげた FAR 会 (Fellowship for the Advancement of Radiology) も、会員の温かいご理解、ご協力のお陰をもちまして今年で 10 周年を迎えることが出来ました。心よりお祝いと御礼を申し上げます。

会の目的の一つに「日本放射線技術学会 (JSRT) の支援」を挙げておりますが、今年は、京都にて誕生した (1942 年 11 月 16 日) JSRT の総会学術大会も 67 回を数えました。更に、技術学会が社団法人から公益社団法人に変革された年でもあります。振返って考えれば「永い伝統と歴史のある技術学会を築きあげて来たつわもの達が」現在の FAR 会を構築、運営しているものと自負しております。そしてここ神戸は、FAR 会の発足そして 39 回秋季大会と共に 10 周年を祝う地として何かの縁を感じずにはおられません。

今年は記録に残る M9.0 の東日本大震災に見舞われました。思い返せば、FAR 会の事業の多くに地震との縁の深さを感じる次第です。平成 7 年 (1995) の阪神・淡路大震災の神戸で「FAR 会発足」、「2004 京都高雄の集い」では宴会前に起った新潟県中越地震の揺れを感じ、「2010 杜の都への旅」での宿「一の坊」も、地震、大津波に襲われ大きな被害を被ったとの情報を頂いております。

更に关心を寄せざるを得ないのは、大津波による未曾有の原発事故が発生したことではないでしょうか。対応は現役の学術集団に委ねるとしても、FAR 会皆さんの経験に基づく頭脳と JSRT 会員の常に新しい知識が融合し、未来に向かった技術が役立てばと願っております。

FAR 会発足 10 周年に当たり “次の 10 年後に皆さんと共に、FAR 会の成人式を楽しく、そして盛大に開催する “ ことを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

公益社団法人として、公益の増進と健康社会の実現のために

日本放射線技術学会 代表理事 真田 茂



FAR 会設立 10 周年、誠におめでとうございます。

平成 23、24 年度と代表理事を務めさせていただきます金沢大学の真田と申します。10 周年のお慶びを申し上げるとともに、最近の学会運営についてご報告させて頂きます。

小寺吉衛前代表理事のリーダーシップの下、本学会は 2011 年 3 月 1 日に（新）公益社団法人へ移行しました。2009 年度からその移行について本格的に準備が始まりましたが、当時は解決すべき課題が山積していました。

まずは、財務的な対応が困難を極め、定款や諸規定の変更が時間に追われ、新法人の役員体制とそれに伴う選挙日程の詰めなど、喫緊の課題が目白押しでした。一方、早い時期に一般社団法人への移行を決めた他学会のニュースや、「学術団体を対象として、別の法人制度が出来る予定がある」などと言った虚報もありました。

実は、執行部として全く迷いが無かったわけではありません。しかし、新法人移行対策特別委員会が動き出す頃（第 1 回委員会 2009 年 5 月 24 日）には、FAR 会会長の橋本先生の JSRT 誌巻頭言（「公益法人制度について」2008 年 12 号）に導かれるように、ほぼ大方針は決まっていました。それと、公益法人化に向けて理事会内部も各地方部会とともに、実に見事に足並みが揃っていました。部会会費の統一、本部と部会会計を連結しての大改革などに学会を挙げて取り組んだ結果、来年には 70 周年を迎える本学会のポテンシャルを余すことなく発揮して、心地よい衣替えが出来たと考えています。

さて、公益社団法人に移行した今、本学会は一層、公益に資するような展開を目指さなければならぬと考えています。私たちが有する高度な専門技術と知識を直接的に社会に提供して公益に寄与することが学会の使命です。未曾有の大事故である福島原発の問題を契機として、今、“放射線”の名を冠する我々に学術団体として果たすべき使命が突きつけられています。社会に支えられながら学会は在り、また学会は専門的活動を通じて社会を支える義務があります。既に関連の委員会や専門分科会が連携して様々な問題に対処していますが、今後の長期的な取り組みが重要だと考えています。

引き続き、FAR 会の先生方にはご支援を賜りながら、歴史と伝統に培われた学会運営の安定した継続性を堅持しながらも、時代に先んずる革新的な企画・活動を重要視して前進しなければならないと考えています。

末筆ながら、FAR 会の益々のご発展を祈念いたします。

FAR会 設立10周年記念事業に寄せて

FAR会 副会長 山田 勝彦



平成13年4月5日 神戸国際会議場において発足した FAR会は、今年で10周年を迎えることが出来ました（下欄写真参照）。この記念すべき年に、何か後世に役立つ記念事業を行いたいという思いから、本年度第1回役員会で協議した結果、この10年間の FAR会の足跡を纏めた「設立10周年記念誌」の編纂と、「FAR会のシンボルマーク」の制定に意見が一致しました。

記念誌の内容は第1章を「FAR会10年の歩み」とし、FAR会の2大事業であります、懇親事業と情報誌を中心まとめ、第2章では約30名の FAR会会員の方々に「この10年間、心に残る想い出」の原稿を依頼し、ここに19名の方々からご執筆を頂きました。また第3章は「FAR会10年間の記録」を纏めましたが、この記録は今後の FAR会の貴重な資料として後世に残るものと確信しています。一方、「FAR会シンボルマーク」は次頁に詳細を記載していますが、4名の方から10点の応募を頂き、世話人会で厳選させて頂きました結果、ここに前越 久氏のデザインが正式採用されました。

今後は、このシンボルマークは情報誌をはじめ各種会合でもご活用頂き、FAR会の意気を益々高揚させて頂きたいものと、大いに期待しているところです。

ここで10年間の FAR会の会員動向を振り返りますが、発会以来の延べ会員総数は141名となります。この中で14名の方がご逝去、29名の方が退会され、現在の会員数は98名となります。でも発会以来今日まで、およそ90~100名の会員数を維持できたことは歴代の役員諸氏ならびに会員の皆様のお陰と感謝しています。そしてこのような会員状況が今後も継続していくことを強く望むものであります。

そして、この度の記念事業の遂行に当たり、FAR会会員の方々からの個人募金、並びに業界の方々からの協賛広告をお願い致しましたところ、多くの方々から多額の募金、広告を頂きました。このご好意に対しまして世話人一同より深甚なる謝意を表する次第でございます。そしてこの浄財はこの度の記念事業遂行に有効に使用させて頂きますと共に、FAR会の今後の運営にも活用させて頂きたと思っております。

この記念誌は、世話人一同による、まさに手作りのものではありますが、ここに FAR会会員の皆さんに心を込めてお届けする次第でございます。なお、この度の記念事業の企画並びに遂行に当たっては四宮恵次副会長の並々ならぬご熱意とご努力のあったことを申し添えておきます。



FAR会発足記念 2002年4月7日 三宮ターミナルホテルにて

FAR会 シンボルマークの制定（ご紹介）

“制定された FAR会のシンボルマーク”



*Fellowship for the Advancement
of Radiology*

“制定されたシンボルマークの制作者とその狙い”

シンボルマークの制作者 : 前越 久 (名古屋市)

制作の狙い・コメント :

「私は、FAR会の一員であることに無上の喜びを感じています。このデザインは私が応募した3点のなかの基となった作品で、シンプルに“FAR会の力強さ・太いつながり・絆”を表現したつもりです。下段の英文名は、マークの使い勝手により小さくなり過ぎる時は、削除されても結構です。」

“公募参加者のご芳名” (50音順、敬称 略)

四宮恵次 (平塚市)、清水久子 (京都市)、山田和美 (流山市)、前越 久 (名古屋市)

“制定に至る経緯と使い方”

平成23年の事業計画に基づく「FAR会設立 10周年記念事業」のうち、「シンボルマークの会員公募」を5月15日発行の情報誌30号ならびにFAR会ホームページ、メーリングリストを通してご案内いたしました。

公募は6月末日をもって締切、応募10点について、7月21日開催の運営委員会での予備選考（3点）を経て、全世話人による電子選考を行い、新しい「FAR会のシンボルマーク」が決定され、この記念誌上にてご紹介する運びとなりました。なお選考に当っては、応募者名ならびに応募作品について全て非公開としてきた事を付記させて頂きます。

このマークの使い方につきましては、いろいろご意見を頂いており、必要に応じ役員会に諮つて決めていくことを前提としておりますのでご了解頂きたいと存じます。

第一章 FAR会10年の歩み

10年間の FAR 会活動を振り返って（総括） 副会長 四宮 恵次

懇親の集い 10年を振り返って 副会長 川上 壽昭

情報誌の編集に携わって 編集委員長 山田 和美

10年間のFAR会活動を振り返って（総括）

副会長 四宮 恵次

10周年記念誌は、「10年間の会の経緯や足跡を中心に纏めておくことが、FAR会の歴史を振り返るときに正式記録として役立つ」との目的を持つだけに、出来る限り記録に忠実にFAR会活動を振り返って総括することに努めました。

1) FAR会の発足時を振り返って

発足当時の生々しい記録は、平成13年9月20日発行の情報誌“FAR創刊号”に「本会設立への経緯」として前越氏が、また小川編集委員長が「編集後記」に記載されていますので再読して頂ければ幸いです。ここでは少し系統的に整理することとしました。

①JSRTの環境や組織体制の変化

JSRTでは1987年に学会長、大会長制を採用し、1988年からはJMCP（現JRC）が発足、JRS, JSRT, JIRAの産学協力による学術大会の体制が整ったことが挙げられるが、それにも増して「JSRTの組織体制の変革“1994年より13の常置委員会を、JSRTの機能を網羅した9つの委員会に再整備”」したことであろう。



この再整備検討は、1991年頃より、企画委員会（委員長：小川→前越）と組織検討委員会（委員長：川上）の合同委員会で“夜討ち、朝駆け”的合宿、時にはS社の紫明荘で、時には嵐山駅前の宿で、委員持ち寄りの全国の銘酒を夜通し味わいながらの議論は、忘れ得ぬ記憶としてFAR会のボランティア精神にも伝承されたものと納得しています。

②生まれるべくして生まれたFAR会

1999年（平成11年）頃、複数の方より“理事をやめたとたん音信が途絶えてしまうのは淋しい・・”との声を耳にし、今まで5年、10年と毎月のように議論を交わしてきたのが現役を退いた途端に手持ち無沙汰になることを痛感した次第でもある。

従ってこれらの事情を考慮し、会の発足に当つての会員資格は、かつての会長、理事、監事、委員長、分科会長、部会長、大会長の経験者や、三賞受賞者、永年功労会員ならびに事務職員を加え、一応60歳以上としたが、JSRTを愛し、目的にご賛同頂ける方なら「会員の推薦により役員会の承認を得れば、年齢、経験に関係なく入会して頂ける」とこととした。

一方、明治生まれの学会長、実行委員長経験者を中心としたOB会は、昭和40年代（1968年頃）から「三交会」となり、学会開催時に“JSRTの先達を敬う催し”が開かれていたようである。三交会の記録が全くないことから、暦年の開催に関し正確に記載できないが、いずれにしても三交会の精神はFAR会に引き継がれたことは喜ばしいことと理解している。

③FAR会の運営について

FAR会の特徴は、「会の目的」である“会員の親睦を図ることを旨とし、併せてJSRTの発展を支援する”ことと、「会員の扱いと義務」に“会員は年齢、性別、経験など、過去、現在のいかなる事項に関係なく同等の扱いを受ける”の2点が定められているが、とにかく資金ゼロでの発足であり、規約にある世話人（10名以内）は、心から会の趣旨に賛同頂き、5年分の会費を前納願い、ボランティア精神をもって働いて頂ける方のみにお願いした訳である。

現在の規約では「25名以内の世話人を置くことが出来る」となっており、会員数に対して多すぎる感じを抱かれる方もおられると思うが、ボランティアとして働いて頂ける方なら何人でも参画して頂きたいとの願いからである。

④FAR会の名称について

平成13年4月、初めての世話人会で先ず話題となったのが会の名前で。皆さん夫々の想いがあつたが、当初は“放射線医学の進歩発展を願う会” RFP会 (Radiological Friendship Promotion) としたが、名は体を表すとの諺に則り「会員の親睦と学会の発展を願う仲間たち」の意味を込めて“放射線医学の進歩発展を目指す仲間たち”に相応しい FAR会 (Fellowship for the Advancement of Radiology) に落ち着いた経緯がある。

2) 懇親活動を振り返って

FAR会活動の重点となっている懇親会は、①同じ屋根の下で温泉に浸かり、思いつきり語り合う場、②情報誌創刊号の差込み「会員の趣味一覧」にあるように会員嗜好を見ると、今まで頭脳集団であった反動か、あるいはお歳のせいか、健康・旅行を挙げられた方が多く、特にウォーキング、有酸素運動が特出して印象が強い。

懇親会は、2002年の神戸での開催を皮切りに、9年間に延べ18回開催し、それは全国12の道府県に及んでいる。会員の述べ参加人数は485名に及び、18回の皆勤者は、山 哲男先生1人であった。それらの詳細は、次項の「10年間の懇親事業」に委ねるとして、モデル（1）となったのは、平成14年10月の「松江と出雲の旅：湯の川温泉」であろう。懇親会の川上世話人には「安くて鄙びた温泉宿、歴史とロマンが満喫できるスケジュール」と無理な注文をお願いしたが、結果は出雲そばと共に参加者全員、大満足であった。



モデル（2）のウォーキングは、平成14年4月発足パーティの午前「神戸・北野地区異人館めぐり」を行い、「神戸には学会で度々来ているが、昼間に神戸の街を歩くのは初めてだ」と言う方もおられた。さらに、平成15年4月には「古都 鎌倉散策」を行い好評を頂いた。

一泊の懇親旅行は、平成17年までは春・秋2回の学術大会時に実施してきたが、川上副会長の提案で、春の学会が横浜開催に定着してきたことであり、現地世話人の負担が大きいことをから「春は懇親の夕べ、秋は一泊の旅」とすることが決まり、現在もそのルールに従って実行されている。更に2007年からは、懇親会記録を「想い出多き写真集としてCD化」、参加者に配布されるようになった。



3) 情報誌の発刊を振り返って

FAR会活動の両輪の一つは「情報誌の発刊」にあることは申すまでもない。平成13年4月の発足。9月には創刊号。ワープロからパソコンへの変動期の中にあって、年3号の発行は大変なボランティア作業であったことは事実であり、特に第11号（平成17年）からの全頁カラー化は手作りの冊子としては極めて先進的な英断であったと思われる。

10年間に及ぶ情報誌を拝見すると、創刊号の会員寄稿から始まって、第4号では「会員の作品」として、俳句・写真・絵などが紹介され、その後も寄稿・投稿、特集、連載、ご当地自慢など、常に斬新な企画は、初代の小川編集委員長の情熱の賜物として、また、現山田編集委員長に御礼申し上げます。更に情報誌の印刷、発送には歴代の事務局長、事務局の皆さん、京都周辺のFAR会総務委員の皆さんのご協力に改めて感謝申し上げます。

4) 会の情報伝達と広報の変遷

会員の皆さんへの情報提供は、発足時より年3回の情報誌と事務局からの直接連絡に頼っていましたが、平成22年度よりJSRTの協力を得てFAR会ホームページを開設し、さらにFAR会の会員登録者による「簡単に会員相互が情報交換ができるメーリングリスト(ML)」を制定し、ここに情報伝達網を整備することができました。即ち

- ① FAR会の全会員に対して 年3回の情報誌と必要による直接連絡
- ② FAR会のML登録者に対して MLを用い情報伝達、会員相互のメール交信
- ③ JSRT会員や一般の方々に JRSTのHPでFAR会活動の広報

この“10年間のFAR会活動（総括）”を記述する機会を与えられ、身の締まる想いを抱きつつ10年間を振り返って見ました。FAR会は、会員の皆さんのご協力があったことにより10周年を迎えることが出来たものと思います。そして想い起せば、歴代の世話人・役員の方々が示された、豊かな発想と実行力、更にボランティア精神に徹したチームワークの良さが「FAR会の体質を誇るべきもの」として構築されたものと感じる次第です。

懇親の集い 10 年を振り返って

副会長 川上壽昭

FAR 会懇親の集いの大きな楽しみは、その土地名勝・旧跡を巡り、歴史とロマンを味わい夜は温泉につかって疲れを癒し、地元の酒と肴に舌鼓を打ち、懐かしい仲間と夜の深けるのも忘れて当時を振り返りの話に華を咲かせことにあります。平成 14 年 4 月 7 日、三宮ターミナルホテルで 42 名の仲間が集まって発足してから 10 年、その足跡を振り返ってみます。

・ FAR 会発足記念祝賀会の開催

石山 忍氏のお世話で市民ボランティア 4 名の方のガイドで「北野地区異人館」を散策した後、三宮ターミナルホテル 4 階ラウンジで発足記念祝賀会を開催した。ドラの音に誘われて神戸を出港した FAR 会丸。再会に懐かしさと嬉しさでお互いの健康に「乾杯」される会員の姿は、印象に残っています。

・ 神々の国出雲の集い (2002 年 10 月 19 日、20 日)



古代神話の国出雲を訪ねることとなった。

出雲そばを肴に少々のお神酒（？）で身を清め「二拝四柏手一拝」で出雲大社に参拝。神々しい気持ちとなって日本三美人の湯といわれる「湯の川温泉」へ。同じ屋根の下での一泊懇親会は、齢を忘れ、夜の深けるのも忘れて延々と続いた。

・ 古都鎌倉の集い (2003 年 4 月 13 日)

源 頼朝によって幕府が開かれた古都鎌倉。円覚寺、建長寺、鶴岡八幡宮など散策し、歴史の重みを心に刻んだ後、そば処「峰本」で懇親会を開催した。折しも街では“鎌倉まつり”も開催されており、窓から聞こえてくるお囃子に大いに懇親会も絶好調。

・ 秋田男鹿の集い (2003 年 10 月 11 日)

「潮騒の音を聴きながら、潮彩の景を愛で、樹海の湯に浸り、大いに歓談して頂きたい。」との世話人（加賀先生、木内先生、有馬先生）の計らいで男鹿半島を散策した。さすがに東北、旨い肴と酒。皆さま大満足であった。

・ 箱根・湯河原の集い (2004 年 4 月 10 日)

中国撮像技術学会の燕、李両先生の特別参加を得て、万葉の時代から愛されてきた歴史ある温泉地「湯河原温泉 水月」で、疲れを癒すこととなった。道中、雄大な富士山の眺望を期待し箱根大観山に立ちよったが、天気がすぐれず期待外れであったが、夜の部は大盛り上がりであった。



・ 京都高雄の集い (2004 年 10 月 23 日、24 日)

日本有数のもみじ（紅葉）の名所、京都高雄の「もみじ家別館」で一泊の懇親会が開催された。秋たけなわの京料理に舌鼓を打ちながら賑やかな宴となった。



また、京都在住会員による「新撰組 in FAR」の寸劇も披露され宴も大いに盛り上がった。（小道具は、太秦撮影所から借りた本物）

・安房・鴨川の集い（2005年4月10日）

アクアラインを通って東京湾を横断、自然と歴史と文化が融合する、美しいまち・鴨川を旅した。リゾートホテルのような「亀田メディカルセンター」を見学した後、「オオクラ アカデミヤパークホテル」の中華料理とカラオケで楽しい夜を過ごした。

・薩摩の集い（2005年10月22日、23日、24日）

徳川13代将軍家定（いえさだ）の正室となった篤姫の故郷“薩摩”を2泊3日で旅した。途中「知覧特攻平和会館」に立ち寄り、当時の特攻隊員の遺品に胸をつかませながら、涙をこらえて「指宿ロイヤルホテル」到着。砂風呂・温泉で旅の疲れを癒し、早速に焼酎での乾杯。

2日目、開聞岳を眺めながらフェリーで桜島へ。黒酢工場など見学した後二日目の宿である“霧島山麓荘”へ。早速、硫黄温泉に浸かり、風呂上りに焼酎で乾杯。満足、満足。



・横浜懇親の集い（2006年4月8日）

JRCの春季学術大会が暫く間、横浜市で開催されることになり、FAR会の集いも「春は懇親の場のみ」とし、秋に名勝・旧跡巡りの一泊旅行」となった。萩原 明先生のご紹介で「知らないタクシー運転手はモグリ」といわれるほど有名な「初芳鮓」で活きた魚と旨い酒で浜の夜を満喫した。

・北の大地の集い（2006年10月21日、22日）



久方ぶりの北の大地。嬉しそうな皆様の顔。

萩原康司先生の名ガイドに誘われて一路小樽へ。それぞれの想いで運河沿いを散策した後、定山渓「グランドホテル瑞苑」へ。事前の「お酒好きな先生が多いらしい」との情報もあり世話人の方に大変迷惑をお掛けすることになったらしい。翌日は、豊平峡での紅葉観賞、北海道芸術の森での芸術に触れ、支笏湖畔での昼食と「北の大地の恵み」を満喫。

・横浜懇親の集い（2007年4月14日）

昨年、酒よし肴よしボリュームよしで好評であった「初芳鮓」で再開。「鉄火巻き、マグロの握り」に再挑戦するも敢え無くダウ。矢張り年齢には勝てません。それでも、呑むことと喋ることは、老いてますます盛んなりでした。

・伊勢・志摩の集い（2007年10月27日、28日）

日本人の心の故郷「伊勢神宮」に参拝することになった。バスは名古屋を出発して伊勢街道を一路鳥羽へ。途中、二見ヶ浦の夫婦岩を見学（生憎、台風の余波で近づけず残念）した後「鳥羽 ビュー ホテル」へ。明日の「伊勢神宮正式参拝」はスーツにネクタイ着用、酒臭い人は参拝不可」とお達しが出ていたので、全員が温泉とお神酒で身体と心を清めて早めの就寝予定であったが、何時もの元気な宴会に。翌朝は、五十鈴川で身を清めて内宮参拝。酒臭さをハンカチで隠して「南玉垣御門内」で御祈祷を受け、お神樂を奉納。全員が清々しい気持ちとなって「おかげ横丁」を散策。お昼は「てこね寿司」を肴に乾杯。



・横浜の集い（2008年4月5日）

「横浜の中華」が食べたいとの会員の声に押され中華街にある「龍鳳酒屋」で懇親の集いを開いた。中国から4名のお客様にもご参加いただき、和やかに情報交換ができた。

・軽井沢・草津の旅（2008年10月25日、26日）



紅葉真っ盛りな軽井沢を出発し「草津よいとこ 一度はおいで」と唄われる草津温泉へ。車窓に映る紅葉を愛でながらの旅。途中、白糸の滝と225年前のあさま大噴火の名残「溶岩原野」を散策し「草津温泉 ホテルたかまつ」へ。「名湯草津の湯」で皆さん十歳は若返り、夜の宴会は大はしゃぎ。翌日は白根山に登って湯釜見学、軽井沢に戻って「信州信濃の新そば」を賞味。

・横浜の集い(2009年4月18日)

年甲斐もなく浮気した昨年の中華料理に懲りたのか、純粹な日本料理の懐かしさを想い出し、本妻「初芳鮓」で懇親会。矢張り日本料理は「最高」と大いに盛り上がる。

・美作・湯郷への旅(2009年10月24日、25日)

懇親会事業の原点に立ち返り、静かな鄙びた温泉宿で美味しい肴を当てに杯を傾けながら大いに語り合う機会を作ろうをコンセプトにして決めた宿が「湯郷温泉 季譜の郷」であった。道中1時間半のバスの旅は窮屈であったが、その分、疲れを癒す温泉の温もりと宴会の料理は格別であった。翌日は、天下の名園「岡山後楽園」を散策した。



・横浜の集い(2010年4月10日)

満開の桜の迎えを受けて「ランドマークタワープラザ内の京料理美濃吉」で35名もの記録的な参加者を得て、賑やかな楽しい一夜を過ごすことができた。楽しい時間の経過とともに酒量も進み予算を大きくオーバーした。反省。

・仙台 松島の集い(2010年10月16日、17日)



芭蕉が、あまりにも感動的だったため句を読めなかつたといわれている松島。その松島を旅することになった。途中「西行戻しの松」の展望台からの松島の美しい眺めに心を奪われたまま、有名な加賀屋ホテルより評判が高いといわれる素晴らしい「松島一の坊」ホテルに到着。早速、露天風呂で疲れを癒し夜の宴へ。皆さん満面の笑み。翌朝は、潮風に吹かれてカモメを友にしてさまざまな景観を見せる島々の間を巡りながら塩釜までの遊覧船の旅を満喫しました。それだけに、3月11日に東北沖を震源として発生した想定を超える大地震・大津波の甚大な被害に深く心を痛めています。一日も早い復旧・復興を祈念しております。

発足以来10年間の懇親会事業を足早に振り返ってきましたが、春秋に開催されるFAR会懇親会は「論語」の「学而編」にありますように「朋あり遠方より来たる、亦楽しからずや」そのものだらうと思っていますし、私にとりましては「青春」であり「老いらくの恋」であったのかも知れません。

最後に、この10年間懇親会の開催に多大なご尽力を賜りました世話人の方々に深く、厚く御礼を申し上げます。

情報誌の編集に携わって

編集委員長 山田和美

情報誌の創刊号が発行されたのは、平成13年9月20日です。この年の4月5日いろいろな曲折を経て「FAR会」が発足してからわずか5ヵ月後のことでした。

今、創刊号を紐解いて見ますと、ただ情報を伝えるだけではなく、親しみやすい形で伝えようとする、初代小川編集委員長の意気込みが、ひしひしと伝わってきます。

多くの方々から原稿が寄せられており、退職後の現況や趣味を楽しんでおられる様子が伺えます。

また、折角できた情報誌を育てようとする気持ちが、皆様の原稿に感じられます。

暫くは暗中模索の状態が続きますが6号を発行する頃から、何となく1つのパターンが出来上がってきたように思われます。

表紙の会長、副会長による「ごあいさつ」、春、秋の旅行を兼ねた懇親会の案内とその報告、会からのお知らせ、特集は5号から組まれていますが、既に2号の会員投稿にその兆しがあります。その頃の特集を見ますと、執筆される方々も活気に溢れておられた様に思われます。この他会員による絵画、書、写真、俳句など多くの文芸作品が投稿され紙面を飾りました。JSRT情報も掲載し、学会参加や機器展示閲覧の便宜も図りました。

連載物のはしりは、3号の「日本酒の話」で、5号から大塚昭義先生の「有酸素運動とは」が始まります。木内繁夫先生のそば談義「山形そば風土記」は7号からでした。読むほどに蘊蓄の深さに驚かされました。この7号から何故か私が編集に加わることになります。

木内先生の後を受けて、10号から始まった、遠山坦彦先生の「四国八十八ヶ所霊場巡り」は圧巻でした。結局22号まで続くことになります。自ら車を運転しての霊場巡りで、軽妙洒脱な文章は、次号を楽しみに待たれた方も多かったのではないでしょうか。取材に掛かった費用も相当なものだったと思われます。



その後の連載は「ご当地自慢」が続いています。こちらも、その土地ならではの秘話など読み応えがあります。10号でカラー化の試みがあり、11号からオールカラーに踏み切りました。そして秋の旅行で新撰組のお芝居が披露されたのもこの頃です。

第 59 回総会学術大会以後、会場の都合で春の学会は横浜に固定されたため、地元役員の負担に配慮された川上副会长の発案で、春の旅行は平成 17 年の「安房・鴨川の集い」が最終となり、会場近くで懇親会を開くようになりました。最初の「FAR 会懇親の夕べ」は横浜「初芳鮨」で盛大に開催されました。15 号にその様子が記されています。

15 号から小川先生の帝京大学での業務が繁多となり、私が編集委員長を引き継ぐことになりました。とはいえ、編集作業は暫く二人三脚で進めて来ました。

16 号の山田勝彦副会长の「ごあいさつ」で FAR 会発足 5 周年について述べておられます。

その後、世の中の喧騒をよそに、当会は比較的安泰に推移しています。ただ会員の年齢上昇は避けられず、会の活性化が叫ばれるようになりました。ついに 24 号では「新入会員募集」の広告記事が登場しています。

27 号には FAR 会のホームページの完成が報じられております。このホームページでも情報誌の閲覧ができますのでご活用ください。

ただ、確かにネット利用の便利さは否定できませんが、どなたでも手軽に情報を手にできるのは、こ

の情報誌しかないと自負しています。小川先生の体調不良や私自身の老朽化も進み、新しい編集委員を求めておりましたが、幸い、伊藤博美、森 克彦、石井 勉、お三方の賛同をいただき、28 号から編集に参加いただいています。これまでの基本を守りながら、新しい感覚でより親しみのある情報誌に

育ててもらいたいと願っています。また、総務委員会のご協力を得て、「会からのお知らせ」も詳しく、分かりやすい内容になりました。そして、会発足 10 周年目の今年 5 月、30 号を発行しました。「東日本大震災」の影響で多少遅れるのではないかと危惧しましたが、皆様のご協力で予定通りお届けでき安堵いたしました。

ここまで滞りなく発行できましたのは、歴代の事務局長、事務の方々、事務所近隣の会員の方々によるお力添えの賜物であり、深く感謝いたします。

この小文をまとめるに当たり、情報誌を見返してみると、西国に旅立たれた方が少なからずおられます。会員の皆様には、どうか、いつまでもお健やかにお過ごしくださいよう祈念いたします。



第二章 この10年間 心に残る想い出

- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1. 情報誌 “FAR” 創刊のころ | 小川 敬壽 |
| 2. 今だから話せる裏話（設立時の想い、夢、………） | 四宮 恵次 |
| 3. この 10 年と言えども 想い出はいつも青春時代 | 遠山 坦彦 |
| 4. FAR 会でも千明先生あり | 藤田 透 |
| 5. FAR 会発足記念行事裏話 | 後藤 正季 |
| 6. 「京都・高雄の集い」開催裏話 | 山 哲男 |
| 7. 車椅子でお伊勢さん参り | 前越 久 |
| 8. 今だから話せる裏話（懇親会世話人二度経験から） | 川上 寿昭 |
| 9. 10 年ひと昔の何と早いこと | 平林 久枝 |
| 10. 思い出深き 松島の壮観、麗観、偉観、幽観 | 金山 敬典 |
| 11. 学会事務局の思い出 | 清水 久子 |
| 12. 事務局から会員の皆さんへ | 宮高 瞳 |
| 13. 生涯最大の想い（東日本大震災との遭遇） | 木内 繁夫 |
| 14. 東北沖地震に寄せて（仙台・松島の思い出） | 速水 昭雄 |
| 15. 松島への旅地を襲った地震と津波 | (佐々木 代) 加賀 勇治 |
| 16. この 10 年間 心に残る想い出 | 服部 繫 |
| 17. 技師 三代になりそうです | 小倉 佐助 |
| 18. 心に残る想い出（プロの厳しさを知った一局） | 野原 弘基 |
| 19. 高速バスの運転手評 | 加賀 勇治 |

第二章 “この 10 年間、心に残る想い出” の執筆を「FAR 会設立から 10 年間、何でも結構です」とお願いしたところ非常に広範囲の原稿が集まり、お願いした立場の者としては喜びながら、その掲載順に頭を痛めた次第です。

結果的には、

- ① FAR 会に関する想い出
- ② 懇親会の想い出
- ③ 事務局の想い出
- ④ 東日本大震災への想い
- ⑤ その他の想い出など

に分類し、掲載順とさせて頂きました。

情報誌“FAR”創刊のころ

小川敬壽

平成13年9月から情報誌“FAR”の編集を担当するようになって早10年。その間、平成15年9月（7号）から山田和美氏の協力を頂き、平成18年5月（15号）以降、山田氏に編集長を交替した。

その後、平成22年5月（27号）から伊藤博美氏、森克彦氏、石井勉氏の3氏が編集に加わり、私は22年度をもって任を解いて頂いた。

〈情報誌の名称と表紙デザイン〉

平成12年ごろ、元学会役員の方から「かつて学会活動にご苦労された方々が何の消息もなく、現役を去っていくのは寂しい」という意見が寄せられ、それを受けた発起人によって会の規約と名称が纏められた。

情報誌の名称は、会の名称「FAR会」に倣い“FAR”に、また表紙デザインも決定された。

〈編集方針〉

“FAR”誌は会の活動状況を会員に伝えると同時に、会員個々の情報やJSRTの動きを掲載して会員間の情報を多くし、旧交を暖めることにある。そういう意味から、年3回発行の“FAR”的役割は重要で、特に会員から投稿される原稿や書画ができるだけ多く掲載した。

会員に楽しく読んでいただくために、読みやすく興味をそそる誌面作りに努めたつもりだが、何分機関誌の編集は初めてだけに、号を重ねても満足のいく誌面にはならなかつたことが思い出される。

〈誌面作り〉

誌面を作る上で考えたことは、印刷製本作業を事務局の方々に担当して貰うことから、製作の手間と経費を極力抑えるために、誌面は活字だけにし、モノクロのゼロックスコピー、A3両面刷2つ折、総頁は4頁の倍数（最大12頁）などを考

えて創刊号を編集した。当初12頁の目標は2頁超過し、A3両面刷りも実現できず、結果として事務局には多大の労力をかけることになった。以後総頁は12頁に収まるよう努めたが、10年間（総巻30号）で5号分に頁数超過が発生した。しかし、これも会員の投稿熱意の表れ、ひいては本誌への関心の高さを表すものと有難く感謝している。

また創刊以来、誌面は文字原稿だけの編集を中心したが、活字だけの誌面は面白味に欠け、本誌を楽しみにされている方々に読んでもらうには甚だ申し訳ないという思いから、3号から6号までの写真をモノクロ画像で編集してみた。しかしモノクロではどうにも興が沸かない誌面になつたため、10号の画像だけをカラー2頁にまとめて途中に挿入したが、これもまた纏まりのない結果になった。

やむなく11号以降の画像は全てカラー化することになった。1台のプリンターで100部を印刷するには3日間の日数と手間を要し、発刊以来今日まで事務局には多大のご苦労を懸けている。

この10年間、年3冊の“FAR”を期日に遅れることなく、また会の目的達成のためにお役に立てたことは、偏に原稿をお寄せ頂いた執筆者の皆さんと事務局の方々のお陰と心から感謝申し上げる次第である。

今だから話せる裏話（設立時の想い、夢、そして今の心境）

四 宮 恵 次

情報誌 FAR 創刊号に掲載されている“本会設立への経緯（前越 久）の文中にある変人とは、恐らく私の事だろうと思う。

確かに“理事を辞めたとたんに音信が途絶えてしまうのは淋しい。そこで OB 会のような組織が作れないか”と奔走したことも事実である。ただ問題は、資金が全くないことで、知恵を絞った結果は、「気心の知れた方々に“とにかく 5 年間の会費”一万円を前払いとして徴収し、それから内容をお話しする手法を取った記憶がある。その時、全面的に御知恵を拝借したのが、永年 JIS やジョイントミーティングで、時には立場の違いから激論を戦わせた橋本 宏先生で、ご賛同頂いたのが発足時に世話人」をお願いしたメンバー構成であった。

振り返れば、昭和 58 年（神戸）から始まった JIRA の放射線機器技術発表会は当時としては画期的な企画ともいえたが、反面 JSRT ならびに JIRA 幹部が、正直のところ名前も顔も良く知らない状況であったことも事実であった。そこで橋本先生（当時の涉外委員長）と秋季大会前日に両会幹部による「膝を付き合わせた交流の場“ジョイントミーティング”を企画し、その最初の試みが昭和 62 年に浜松での開催となった訳である。このジョイントミーティングも回を重ね、「初期の開催目的も達成したこと」から平成 8 年より「合同ミーティング」と改称し、引き続き産学交流、懇談の場へと移行している。

話は異なるが、私は平成 9 年 3 月に発足した、工業会の OB 会「JIRA BS 会（Brilliant Senior）輝しきシニアの会」の設立にも故飯田 昇氏と共に奔走した経緯がある。当時の会長：外丸金之助（コニカ）氏の“俗に 50, 60 は漬垂れ小僧、70, 80 は働き盛り”と挨拶されたことが記憶に残っているが、現役時代のメーカー対ユーザーと云う確

執を超え、共に OB となつた BS 会と FAR 会の会員が、趣味や人間同士のお付き合いが深くなるための紹介なれば、人間性豊かな新しい産学連動が出来れば幸いと考えた訳である。

しかしこれらの想いは決して他の人には漏らさず、具体的には BS 会から飯田、前田、垣内、筒井、牧野の諸氏を FAR 会への勧誘に成功した。これらの方々の協力を梃子に、何時かは FAR 会と BS 会の合同懇親会を開く夢を見た訳である。

その後、BS 会員の考え方の変化を注意深く眺めてきたが“歳と共に頑固になる”と言われるよう、専門技術者としての永年の志向のためか、頭の柔軟性を期待したことが如何に難しいかを知ることとなり、私の夢も泡と消えた訳である。しかし、考えてみれば、私と同じように JIRA（理事、副会長）と JSRT（理事）の役員を兼ねた経験者として現職の前田幸一氏が居られる。一方、当会の橋本会長も JIS の関係から BS 会にも参加されて居られるなど、両会員の交流を考えると、私の夢も完全に消えたことではなく、まだまだ続けて夢を見ていきたいと思い続けることとした。

実は、『理事を辞めたとたんに音信が途絶えてしまうのは淋しい』と考えた 10 年前の淋しさをいま実感として味わっていたのであるが、この 10 年間、FAR 会の将来を想い、日夜共に楽しみ、苦労して來た仲間、（木村）千明ちゃん、（飯田）昇さんなど、多くの方が鬼籍に入ってしまったことと、この 10 年の経過は“歳は誤魔化せない”と言われるように、あちこちが“痛い、痛い”という悲鳴の声である。それは反面、前向きにやらねばならない仕事、楽しみが無くなつたと云うような事かも知れない。その意味で、山田勝彦先生からの「10 周年記念誌の作成提案」は、まさに得がたき餌を与えられた感謝の持ちで一杯である。

この10年と言えども 想い出はいつも青春時代

遠山 垣彦

想い出は、自分の心に温めておく宝もの。僅かな自惚れと反省を取り混ぜて披露したところで何になろうかと。

それでも FAR に関して ね～。

遙か昔に大阪で、浅学菲才の私が連なる席では無いと躊躇を覚えたのが初参加だったと思います。その後は、神戸、湯河原、横浜などに参加させていただきました。情報誌に近況なども掲載していただいた。

仙人になりそこねた話を見せたら眼科クリニックの諸嬢は笑っていました。

四国八十八カ所巡りは2本目の掛け軸として残っています。3回目の巡礼は、何か悟りを得られそうな予感がしていました。でも、長く苦しい歩き遍路は思いもよらず、唯一の方法は車遍路です。狭い山門石垣、難路を思い描くと躊躇し、3本目の掛け軸は、“四国讃岐琴平うどん正流道場中野学校卒業証書”秘伝帳に化けました。讃岐粉を取り寄せた修練を知己に供し、最近は格闘様相に汗する始末です。

高知で生きる糧調達にはスーパーカーは欠かせず、車が基軸の生活にどっぷりと浸っていました。四国、中国、九州で開催される学会には当然、車を走らせました。身体能力最盛期を過ぎていながら遠くへ走る新世界が楽しくて。

中国四国部会は和やかな研究発表の場でした。近年は、中四国放射線医療技術フォーラムとなり同地区技師会と共同開催されています。このフォーラムは臨床の思いつきも発表の機会をもらえ、若さも溢れる良い集いです。2010年は地元高知の開催で、図南病院最後の仕事を院長と共同で発表させていただきました。弱冠73歳でした。

海外旅行の楽しさを覚えたのも図南病院でした。朝から忙しいスケジュールに追われる団体旅行は好みに合わず、割高ながら自由の効くコースに偏りました。

高知に転職された倉西誠氏ご夫妻をお誘いして鹿児島に走ったこともありました。女性は温泉の毎日を楽しみ、私たち男性は学会参加。台風通過後の澄んだ青空と草原に靡くススキの白穂のコントラストが記憶に残ります。長年の感謝を込めた帯同サービスが学会参加を物見遊山と誤解され困ったことでした。みどりの桜を訪ねた京都、花とB級グルメを求めて大山日帰りドライブなど忙しく楽しかった日々。幸運にも天候はいつも晴天でした。

いくら楽しくても車生活から抜け出す時期が来ました。交通至便な棲家を探し、未知の橋本に転居しました。15階に住んで一月足らず、3.11震災に遭遇。余震の都度ゆる～く、長が～くれます。この体験の吉兆は何れかと(= - =;)。これから的人生に新しいものを足す意欲と体力維持を苦慮し、臨床現場を離れてなお学会と関連する可否、FARも含めて考えているところです。

想い出と言えば、FAR会費請求を受けて驚きました。終身会費と2度目の追加終身会費を納めたのは記憶（思い）違いかと。思い出さない方がよかったです。

指定を受けて心ならずも余人に分かる筈なき、想い出の一部を過去から取出してみましたが・・・・・。

（平成23年2月、神奈川県相模原市橋本に転居）

FAR会でも千明先生あり

藤 田 透

FAR会は、私が学会総務理事を務めている時に創設され、神戸で開催された初回から参加させていただきました。総務理事、学会長での参加時には招待いただきために祝儀が高くつき、早く入会させてほしいと思ったものです。退任後に入会すると早々に世話人に任命いただき、懇親会の担当をさせていただいています。

創設時より懇親会担当は木村千明先生で、細やかな気遣いで準備・運営されてきました。千明先生とは懇意にしていただいていましたので、非会員の時から下見旅行には何度も同行させていただきました。もちろん皆な自費で参加するのですが、本番と同様のスケジュールで行程を下見して、夜は楽しく飲み交わすのが常でした。写真は2009年5月「美作・湯郷への旅」の下見の一コマで、千明先生はこれが最後となり本番には体調不良で参加されませんでした。

私の「FAR会心に残る想い出」は、やはり千明先生に尽きます。どこででも場を盛り上げる気遣い、会議での必要な一言、不得手なことも実践する等々、人を惹きつける魅力的な人でした。



翌年、千明先生が亡くなると、その役が私に廻ってきました。光栄と言うべきでしょうが、私には千明先生のような能力はなく、神澤先生他の助けを得て担当しています。2010年春は萩原明先生のお世話により横浜「美濃吉」で35名という記録的な参加者で開催できました。秋は佐々木正寿先生他のお世話で日本三景松島「杜の都への旅」の一泊旅行でした（この時のホテル「一の坊」は東日本大震災の影響で未だに休館ということです）。そして2011年春は石井勉先生のお世話で横浜「屋形船」を準備していただきましたが、中止となってしまいました。これは「心に残る」



ではなく、「記憶に残る」思い出となってしまいました。

2011年秋は神澤良明先生のお世話で「2011 淡路島を巡る旅」です。写真は3月に行った下見の時のもので、山田先生・山先生にも同行いただき、綿密な計画を準備してきました。今後とも、千明先生に叱られないようにしっかり準備して、一人でも多くの皆さんに参加してもらえるようにしたいと思っています。

FAR会発足記念行事裏話

後藤正季

平成13年4月、FAR会が発足してより今年で10年。同年4月5日に第1回の世話人会が開催され、何故か世話人の1人に選出され（なぜ世話人に選出されたのか未だにわかりません）、その席か、あるいは第2回の役員会で翌年4月神戸での第58回総会学術大会時に「FAR会発足記念行事」を行うこととなり、その世話人に今は亡き木村千明先生と私が指名されました。

何分、三交会という素地があるとは言え、FAR会として初めての行事であり、何から手をつけていいのか分らなかったのですが、とりあえず、

1. 旅行社は普段から取引のあった日本旅行とした。
2. 宿泊ホテルと懇親会場は交通の便を考えて三宮ターミナルホテル。
3. 懇親会だけではさみしいので、観光を兼ねて神戸市内のウォーキングを考慮
4. そのほかの問題点として
 - 1) 会からどの程度の財政補助をするか。
 - 2) 動員方法(少なくとも30人以上は集めたい。30人未満だと貸切にならない。)
 - 3) メーカーに賛助依頼をするのか。
(三交会では富士メディカルにお世話になったようです。)
 - 4) 当日雨天の場合どうするか。
 - 5) 当日夜のホテル内での懇親の場をどうするか。

等々について頭を悩ましたのですが、案ずるより産むがやすいので、懇親会の出席者は、会員の半数近くの42名となり、うれしい悲鳴をあげました。ウォーキングは神戸に来られてもあまり行かれないであろう「異人館めぐり」とし、幸いにも晴天に恵まれ、神戸市のボランティア団体から、うら若き？女性4人が案内人として参加して頂けることとなり、(これも苦労しました) 橋本会長がボランティアに手を引かれて坂を上がるという微笑ましい光景もり、13人の参加者で楽しんで頂けたことと思います。今は亡き石山 忍先生にはお世話になりました。

世話人の先生方に助けられて、何とか無事に終了しほっとしたところです。



「京都・高雄の集い」開催裏話

山 哲 男

平成 16 年度秋季の FAR 会の催しは大阪で開催される第 32 回秋季学術大会時に併せて行う事が当時の役員会議で決まり、FAR 会発足記念 Party が神戸で行われて以来、久しぶりの関西での開催となった。役員会議で四宮恵次先生や今は亡き木村千明君から「関西で行うのだから世話人は山しか居ないよ」と世話人の指名を受けた。当初、大阪での秋季学術大会時の懇親会であるため大阪府下での開催を考えたが大阪府下で適当な所が思いつかず、京都で行う事とし、京都で行うのであれば、世話人代表には山田勝彦先生にお願いし、野原弘基先生と清水久子さんにも世話人となる様にお願いするのが一番良いと考え、「下働きは全部私が行いますので是非お三方には世話人になって下さい」とお願いした。

京都市内で一泊出来る所を色々考えたが、結局「高雄」方面が良いもでは考え、当時 JSRT 常務理事会出席のため京都に来られた四宮恵次、木村千明両先生を誘い、春の「高雄」へ最初の下見を行った。この時、宿泊場所として高雄・清滝川河畔に建つ「もみじ家」が良いのではないか、また翌日の観光は紅葉の名所で名高い「神護寺」や鳥獣戯画でも有名な「高山寺」への散策とする基本計画を立てた。この計画を基に山田勝彦先生、野原弘基先生方にお話しし、平成 16 年度秋の FAR 会懇親旅行は「京都・高雄の集い」とし、懇親会は「高雄・もみじ家別館」で行う事となった。

開催前の夏に、山田先生、野原先生、清水さんと当時の福西事務局長を誘い再度「もみじ家」の下見に行く事した。当日は「もみじ家別館」の各客室や宴会場となる大広間を見せて頂き、また翌日の神護寺までは徒歩で参道を行かず、関係者のみが使用する山道を旅館のバスで行ける事等を調べた。下見後、清滝川の川面に設えられた床で鮎料理を愛でた。下見当日は初夏とはいえ大変暑

い日で、美味しい鮎を肴に皆様方のビールも頗る美味しそうで、その量も増えたご様子だった。

食事をした場所が川面であったため、「帰りは車を川面まで回しますので皆様方は此処に居て下さい」と伝え、アルコールを飲んでいない（飲めない）私は急な坂道を速足で車を止めていた所へ急いで駆け上ったが、ふと後ろを振り向くと福西局長も私の後を追いかけて来られた。局長はビールをお飲みになっていた上に、暑い日差しの中を急な坂道を私に追いつこうとされた。坂の上に到着された時は、異常な程に汗をかかれ顔色も幾分優れない様にお見受けしたので、「大丈夫ですか？」とお訊ねすると「大丈夫です」との事であったので、皆様方を車にお乗せし高雄を後にした。帰路の途中、高雄の近くにある野原先生のご自宅にお寄りする事になった。野原先生宅前で車から降りられた途端に、福西局長は顔面蒼白でへなへなと道路に崩れ落ちられた。如何されたのかと一瞬脳内出血又は急性心不全になられたのでは、と一同びっくりした。慌てて救急車を呼ぼうとしたところ丁度良い事に野原先生ご自宅の直ぐ近くに病院が有り、その病院へ急遽運んで診察を受けるハプニングがあった。幸いにも局長の状態は危惧した様な重大な事ではなく一過性の熱中症との事で点滴治療を行う事で回復され、大事にならず一同ほっと安堵した次第だった。

尚、「京都・高雄の集い」では FAR 会始まって以来の寸劇「新撰組 in FAR」を清水さんの発案で行った事も懐かしい思い出である。

懇親会当日、一行が「もみじ家別館」に到着直後に、京都にしてはめずらしく強い揺れを感じる地震が起こった。この地震が新潟県を中心に震度 7 の「平成 16 年新潟中越地震」の揺れであった。

車椅子でお伊勢さん参り

前 越 久

2007年10月25~27日、名古屋国際会議場にて第35回秋季学術大会が開催された。これに伴い FAR会では「2007伊勢心のふるさとの集い」と銘うつて伊勢・志摩方面へのバス旅行が企画された。

情報誌19号には、世話人として前越久、山哲男、木村千明と記載されていたが、私・前越は名ばかりで山、木村両氏によって具体的なスケジュールは全て作成されていた。私の手帳の記録を見ると、3月25日（日）午前5:00、腹痛により救急外来受診と記載されている。消化器内科の診断の結果、総胆管結石とのことで手術待ちとなり、たびたびの激痛に悩まされたが6月20日によく名古屋第2赤十字病院にて手術を受けることとなった。表面がトゲトゲした金平糖のような黒い結石が内視鏡手術で9個ほど摘出された。それまでほぼ3ヶ月の間、腹痛に苦しめられたがこれでやっと順調な生活を取り戻すことができた。その頃であった。突然7月7日（土）の昼ごろ、山、木村、川上、四宮、藤田の各氏の来訪があった。

伊勢方面のFAR会の集いの下見をされた帰り道に、わざわざわが家に立ち寄り見舞って下さったとのことでびっくりした。「朋あり、遠方より来る」で感謝、感激した。

色々と下見の状況をお聞きした時、私は脚力が心配で伊勢神宮の拝殿までの長い玉砂利の参道を歩ききることが出来るかかどうか心配であるとお話したところ、すかさず内宮入口の警務員詰め所に電動式車椅子が用意されており大丈夫、との調査結果をお聞きすることが出来た。参道では、かわるがわる車椅子を押して戴き、とんだ世話人で皆様にお世話をおかげすることになってしまった。世話人どころか世話掛け人となっていた。



台風の余波で心配された懇親の集いではあったが、お伊勢さんでは上天気となり、FAR会員の皆様の温かい心に触れることができたことを忘れることができない。

思い起こせば1993年、山田勝彦先生のお薦めもあり初代の計測部会長に就任したのが、(社)日本放射線技術学会に関わった最初である。本学会の役員としての8年間とFAR会会員としての10年間が、私の人生において人と人との絆の深さを最も強く感じた時代であったことに間違いない。

最後になってしまったが「友、遠方より来たる（写真）」の折、お元気であった木村千明氏とはもうお会いできない。衷心よりご冥福をお祈り申し上げる。



今だから話せる裏話（懇親会世話人 二度経験から）

川上壽昭

どなたでも経験されることありますが、職場での忘年会の幹事や懇親会などの世話人を仰せつかったときには、周りに配慮しながら随分と気を遣って務めるものです。しかし、終わった後の人様の評価は「上手くいって当たり前、上手くいかなければボロクソ」となります。

このようなプレッシャーを感じながら幸いなことに、これまで2度も大切な「FAR会懇親の集い」の世話人を務めさせて頂きました。

最初 {FAR会の集い} の世話人を仰せつかった



湯の川温泉

のは、平成14年に第30回秋季学術大会が島根県松江市で開催される時であります。人生の師と尊敬する四宮恵次先生と

生涯の友人としてお互い励ましあってき木村千明君のお二人から「川上さん、あなた出雲の出身だから懇親会の世話人を務めなさい」と命を受けて引き受けことになりました。

その時のお二人からの条件（注文）は ① 一晩中でも語り明かせるような静かで、さびれた温泉宿であること。② 神話の国の散策に宿のマイクロバスがチャーターできること。③ 地元の旨い酒と肴があること。更に ④ 参加する会員負担の少ないこと。等々、当然と云えば当然の条件ですが、私からすれば無茶苦茶な話でゴジャります。

確かに出雲で生まれ育ってきましたが、既に故郷を離れて 40 年の歳月が経っています。いくら出雲の田舎でも 40 年も経てば周りの景色は大きく変わっています。それでも、引き受けたからには、その役目は果たさなければなりません。子供の頃の遠い記憶と地図を頼りに温泉宿を一軒一軒訪ね歩きました。そして、候補にしたのが「湯元 湯の川温泉」でした。早速、木村千明氏と山 哲男氏に連絡をとり、3 人で下見をする

ことにしました。気心の知れた 3 人ですので話しのまとまるのも早い。温泉宿は即、決定。そして「散策」は「堀川めぐり」の船で松江情緒を堪能した後、「出雲そば（割子そば）」と少々のお神酒（？）で身を清めて出雲大社に参拝。「湯の川温泉」で一泊懇親会ということになりました。後



お堀巡り



は 10 月の本番を待つだけとなりました。

二度目の世話人は、岡山市で第39回秋季学術大会

（大会長 大西先生）で開催された時であります。金山敬典氏（徳島在住）と藤田 透氏（京都在住）の三人で務めることになりました。

何せ、3 人とも岡山県の地理には全くの不案内。ネットで人里離れた「静かな温泉宿」をと探し当てたのが「湯郷温泉 季譜の里」です。早速、世話人 3 名と四宮恵次先生、山 哲男先生、木村千明先生の 5 人で下見。



岡山後楽園

2 時間の乗合バスの旅も忘れて、美人おかみと温泉、料理にぞっこん。送迎バス、宿泊料金等交渉して、即決定。（この湯郷温泉下見が木村千明君との最後の旅となりました。）

10 月の本番の旅では、藤田世話人の計らいで岡山後楽園を散策。皆さんの笑顔に安堵できました。

2 度の懇親会世話人を務めさせて頂いたことによって、学会を通して支えあってきた先輩・友人の絆の強さを改めて感じているこの頃です。

皆様に感謝・感謝

10年ひと昔の何と早いこと

平林久枝

2000年の第56回総会学術大会長の役目を終えて、2001年の大会が神戸で開催時に発足したFAR会に入会してから10年とは信じられない。その間にFAR会は形が整い、年々充実してきたのは流石に学会の旧重鎮の舵取りとボランティア精神によるものと感服している。世の中の進歩は著しく特にITの普及によるところ大である。会員のメーリングリストにより各種情報が送られ、学会のホームページで活動が公開されるようになった。しかし、その情報源を作成する方の苦労は続くことで感謝するばかりである。

会員懇親会の記録をひも解くと、その時々の学会開催地と世話人の方々の企画力によるところ大であるが、参加メンバーの顔触れによりイロイロで思い出深い。

我が身を振り返るとFAR会発足の数年後の定年で気楽な生活を送っている。念願の二度目の中南米の長旅に友人と出かけた。昔と違うのはバスで縦断から退職金をつぎ込んで飛行機に変えたところである。35年間の各地の変化、変わらぬ人と、年を経た当方の感性の違いも大きい。当時は仕事と無関係な1年以上の馬鹿げた旅のようであったが、その年代ならではの得難い体験であったと思う。

今回の旅で、お世話になったメキシコの家族を訪ねるのも楽しみであった。



ミニスカートの頃と比べてお互いに貫録十分の姿であるが、昔同様に歓待され、時の経つのを忘れた。メキシコ独立記念日の派手な大行進がある一方で、政治的な問題があるようで、ヌードのインディオのデモ行進が貧困問題を訴えていた。

観光化が進み、チチカカ湖に浮かぶ葦の島の昔ながらの家でもソーラー発電によりテレビが見られるこの頃である。



体力、気力の叶ううちに多少ハードで不便な所でも、まだ見ぬ世界を覗いてみたい。そのうちに体力相応の温泉巡りも楽しめそうである。

思い出深き 松島の壮観、麗観、偉観、幽観

金山 敬典

2001年にFAR会が発足して、事務局の清水久子様のご紹介により入会させて頂き以来、10年間殆どFAR会に出席させて頂きました（2回欠席）。

会員の親睦と素晴らしい諸先輩、諸先生方の出会いを大切にして、今後とも皆出席したいと思っておりますのでご支援よろしくお願ひいたします。

10年間の想い出は、秋のFAR会懇親会での“秋田の男鹿”、“鹿児島の知覧”、特に去年 宮城の“日本三景の一つ言われる松島” 260の島々から

なる松島湾めぐりで、多島海景観が魅力で、松島を一望できる展望台からの眺めは、四大観と名付けられ、観、麗観、偉観、幽観と、それぞれの印象の異なる風景が楽しめました。

そしてその半年後に、「東日本大震災」が発生するとは予想もしなかった。被災地の皆様には心よりお見舞い申し上げ、一日も早い復興、復旧を願ってやみません。

「有馬宏寧先生からの“原稿辞退”に関するメッセージ」

拝啓 今年の仙台は珍しく空梅雨で災害復旧の恵みとなっています。

期日が迫るなか、気がかりにしておりました“FAR会 記念誌原稿”の件ですが、只今、我が家に、震災にあった親戚の一家が二次避難しております、6月20日、3度目の仮設住宅の抽選にも外れ、この夏は同居生活で過ごすことに致しました。

誠に申し訳ございませんが、この様な事情ですので寄稿は無理の状況です。山田先生はじめ関係の皆さん方の記念事業にご尽力いただけます事に感謝申し上げ、「FAR会記念誌」が手元に届きます日を心待ちにして居ります。

敬具

（平成23年6月27日 受信）

「中間光雄先生からの“原稿辞退”に関するメッセージ」

前略ごめんください。

私こと、

昨年暮れ頃より、体調を崩し、入退院を繰り返しており、体力、気力が全く失い失礼を重ねております。申し訳ありませんが10年誌の御連絡を受けながらご返事も致しませず（書かねばと常に思いながら）キット御立腹のことと存じますが、お許しください。

「10年間の過去の思い出」との御指示であります、北海道に皆様をお招きした時のことを、これと申し上げることなく過ぎました。

只今は、お世話になりましたお方々を思い浮かべ、心から感謝しご多幸をお祈りすることのみが募る日々でございます。ご返事が遅れ遅れになって済みませんでした。

敬具

（平成23年7月15日 受信）

学会事務局の思い出

清水久子

FAR会創立10周年おめでとうございます。

今から思えば私の事務局勤務は長いような短いような年月でしたが、思い出すままに簡単に述べさせていただきます。

昭和17年本学会設立以来京都大学病院内にあった事務局は、昭和47年4月西ノ京北壺井町二条プラザ2階204号室に事務局機能を移転しました。私は、この時事務局職員として採用され以後多くの先生方とお付き合いさせて頂きました。



最初に今津博（事務局長代行）、森信一（常任理事）の両先生から事業の沿革を伺い、新人職員二人で事務の担当者から仕事の引継ぎを受けました。当時の主な仕事は各支部から送付されてきた会員の会費納入、や異動などを管理し、それによって学会誌を発送することでした。

昭和48年初代梅原傳介局長を迎えた事務局として体を成したこと、「必勝の信念で・・頑張ること!!」でした。局長の業務は主として理事会の資料・運営に関する事項でした。学会の健全な運営を進めるため事務局員は勿論、特に京都在任の理事、外注に対しても厳しく接しておられました。

昭和50年に社団法人の認可取得。総会学術大会開催に関わる演題募集など全ての事項は開催地の総会準備委員が執り行っていましたが、昭和51年第32回総会学術大会から学会本部の直催になりました。藤正季総会開催委員長指導のもとに運営されることになりました。演題の取り扱い、予稿

集の作成や掲載広告の依頼なども事務局業務の一つとなり、特に広告依頼では橋本宏渉外委員長はじめ委員の先生方と連携をとり100社あまりの広告申し込みを受理し、演題の受付では原稿の内容チェックし、全ての作業が完了後、印刷会社へ入稿するまで緊張の連続でした。

今にして思えば、これらの一連の業務を通じて当時は忙しく大変でしたが活気に満ちた仕事場であった思い出が残っております。そして、これらの業務は21年後、平成9年第53回総会学術大会から学術大会関係全てJRC（旧称：JMCP）が扱うこととなりました。

昭和56年二条プラザ1階を購入、事務局機能を移し、従来の2階は、会議室となりました。



昭和62年には学会誌発行が隔月から毎月1日発行となり、編集担当の職員1名を採用で、事務局長以下4名の職員で賑やかになりました。平成8年からは学会誌の外部委託により事務局の手を離れました。

平成14年には、二条プラザの事務所の老朽化と交通の利便性からビューフォート五条烏丸（五条新町東入）に新事務所を購入移転し、現在に至っています。

事務局の仕事を大過なく勤められたことは、会長・理事の先生方・会員の先生方のご助力、ご厚情によるものと感謝しております。紙面を借りて改めてお礼を申し上げます。

事務局から会員のみなさんへ

宮 高 瞳

FAR会10周年おめでとうございます。

この10年間、事務局もFAR会と二人三脚で成長してきました。ご存知のようにFAR会の事務局は公益社団法人日本放射線技術学会の事務局内におかれています。発足当時の事務局のメンバーは、吉富事務局長をはじめとして清水さん、鈴田さん、砂畠さん、古谷さん、井口さんでした。

清水さんは現在FAR会の世話人として大活躍をされています。その後事務局長が福西事務局長に、職員も変わり、現在では井口さん、砂畠さん、北川さん、寺本さん、澤井さん、私の6人です。事務局のメンバーもここ2年間で寺本さん、澤井さんの新しい人が入り若返りました。私が一番の新人ですが、残念ながら若返りには寄与していません・・・・



後列左から：井口、砂畠、北川、
前列左から：宮高、寺本、澤井、

事務局の仕事は第一にFAR会の会員および会員からいただいた会費を含む収支の管理です。第二に、年3回発行されます「情報誌FAR」の印刷と発送です。編集担当の先生から最終原稿をいただき、印刷、冊子化して会員のみなさまに発送しています。

1年前に新たな仕事が追加されました。それは、昨年開設されましたFAR会のホームページの更新作業です。具体的には情報誌の概要、懇親会活動および会員情報ページを定期的に更新しています。



事務局として楽しみにしているのが、多くの先生方とお会いできる4月の総会学術大会時に行われる「懇親の夕べ」です。今年は東日本大震災のため総会学術大会の横浜開催が中止となり、残念ながら「2011懇親の夕べ」も中止となりました。来年の「2012懇親の夕べ」を事務局一同楽しみにしています。また、秋季学術大会時に行われる1泊2日の旅行は大会期間中でもあり事務局としての参加は難しい状況で、いつも大会会場からお見送りさせていただいています。ビール、お酒、つまみなどをいっぱいバスに積み込んでいるのが印象に残っています。

最後に、FAR会が今後ますます発展していくように事務局としても微力ながらみなさまのご支援をいただき頑張っていきたいと思います。

今後ともよろしくお願ひいたします。

生涯最大の想い出　＝東日本大震災との遭遇＝

木内繁夫

平成 23 年、FAR 発足 10 周年、この時期、この想い出を FAR の皆さんに報告したい。10 年間の想い出というよりは生涯最大の想い出である。

東日本大震災との遭遇、人災との遭遇、健全な地域社会との遭遇である。

天災と人災に遭遇した想い出はフラストレーションに満ちている。

★ 3 月 11 日 14 時 46 分ころ、私の生涯最大の出会いは、突然の横揺れで始まった。揺れは急激に大きくなり、テレビが動き、テーブルが走り、食器棚の引き出しが飛び出す。柱のきしむ音、ガラス、陶磁器の壊れる音、物の落ちる音、家中がガタガタと鳴る。得体の知れない大きな音が家中に響く。建屋は残ったが、LDK 一面の散乱と私室の図書、書類のボタ山も残った。

仙台市の西部丘陵地に住む私は、この時、観測史上 5 指に入る M9.0 の巨大な、数分に及ぶ地震に遭遇し、震度 6 強の揺れを経験していた（今回の最大震度は 7）。

やや遅れた 15 時過ぎ、岩手、宮城、福島の海岸では観測史上最大級の平野部津波に襲われていた。海沿いの痕跡は、鉄筋コンクリート 3 階の屋上に乗ったバスや遊覧船、川口から 5 キロ遡上した場所にも形成された一面の瓦礫、広大な田園地帯の海水塩害である。

★ 日本原子力発電の安全神話まやかしとの遭遇。日本の原発は通常の運転では安全だが、地震津波には 100% 危険だと知らされた。想定を超えた事象だったと称する「想定人災」。いらざる混乱を招かないためと称する「情報人災」。

安全神話も人災なら、政府（官邸、原子力保安院）、東電、現場間の組織保身中心の情報発信、情報の取捨選択能力不足も人災。政府、東電、責任者不在の、政治主導と称する混乱した事故対応も人災。事故処理は原発の現場所長の責任認識で行われていた。福島は地震、津波、原発の 3 重苦に悩まされた。

一方で、災害対処への政治、行政の対応の拙さと遅れも人災。緊急時の決定の遅れと、処理判断の遅れは救援、復旧、復興を遅らす人災である。

地元消防と各地からの自衛隊、機動隊、技術系職員、NPO が救援、復旧を支えた。

★ 電気、水、物流のライフラインは破壊され、情報は携帯ラジオが頼り。照明はローソク、暖房も食糧もなく、生活用水は雨水、飲用は湧水、店舗・医院は閉鎖、燃料がない車社会の原始生活を体験した。

私の住居は残ったが海沿いの人達は住まいも奪われた。

このような、未曾有の大災害に遭っても、秩序の保たれた避難生活があり、略奪行為も、暴動も聞かなかった。全てが欠乏した中でも、ご近所が助け合う地域社会があった。私欲・自利より節度・互助の日本の地域社会は健在だった。

★ このたびの出会いに際して、多くの FAR 会員、元会員などから励ましの手紙やメール、救援物資をいただいた。TPO をみた有難いものであった、改めて感謝申し上げる。

原発事故の収束、復興計画の企画と実施が一日も早いことを祈りながら。

東北沖地震に寄せて（仙台・松島の思い出）

速水昭雄

2011年3月11日に発生した東日本巨大地震とそれに伴う津波被害は、私にとって遙かに想像を超える出来事でありました。被災地の多くは復興にまだまだ時間もかかるでしょうし、被害者の気持ちを思うと居たたまれない気持ちであります。

昨年（H22年）秋季大会時のFAR会では佐々木先生や有馬先生達のお世話で、素晴らしい眺めの「松島一の坊ホテル」にお世話になりました。今まで仙台市には学会や観光などで何回かお伺いしていますし、松島湾の美しい島々も陸からは眺めたことはありますが、今回初めて松島湾周遊船で塩釜港までの船旅を経験できました。また塩釜港マリンゲート市場では昼食とショッピングをすることができ、まだその時の記憶が鮮明に残っていただけに、今回の地震の津波被害はニュースやビデオ映像を見るたびその被害の悲惨さを噛みしめています。



（釜石市の惨状）

特に塩釜港では他の港町と同様に巨大津波に襲われ、マリンゲートも大きな被害を受け恐らく一階の市場は全滅したものと思われます。

遊覧船の停泊する桟橋は浮動桟橋になっていたため、そこに係留されていた遊覧船は無事だったようです。



（釜石港桟橋付近）

松島湾は多くの島々が津波の防波堤効果を発揮し、比較的陸上施設への津波被害は軽かったようです。地震そのものによる被害も思ったより少なく、瑞巌寺の参道にまで津波が押し寄せ、回りの茶店などは瓦礫や泥の被害に遭ったようですが、それでも他の地域に比べれば被害は少なかったようです。瑞巌寺は庫裏の壁などに亀裂や崩壊が見られたが、国宝の建物にはそれほど大きな被害が無かったことは不幸中の幸いであったと思います。しかし養殖中の牡蠣棚は壊滅的な被害を受け、それらの残留物の影響でしばらくは遊覧船での観光が出来ない状況と伺っております。

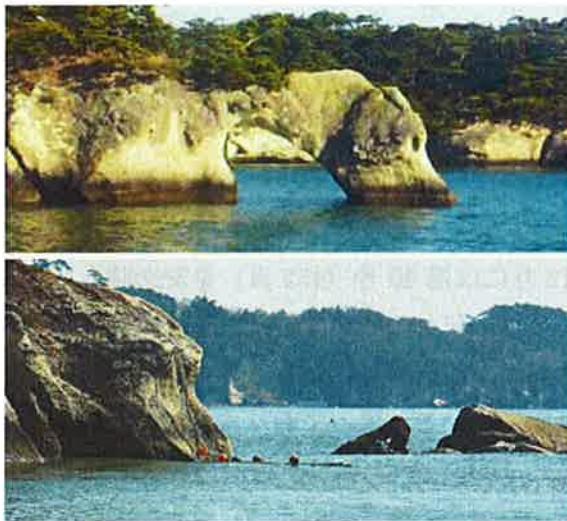
いずれ機会があれば是非もう一度訪ねてみたいと思いますが、一日も早く以前のような活気をとりもどして頂くことを心より念願しております。

松島への旅路を襲った地震と津波

加賀 勇治

西行戻しの松、作務衣姿の案内人、ホテル「一の坊」、藤田喬平ガラス美術館、瑞巖寺、島々を巡る遊覧船、潮風とカモメの歓迎、マリンゲート 塩釜の海鮮丼・・・。今でもさまざまと心に焼き付いている。2010 松島への旅であった。

この思いで深い旅路に激震が突然走った。2011年3月11日のことである。大きな長い揺れとともに引き起こされた停電の混乱のさなか、大規模な津波が襲った。あっという間に渦を巻いて高波が押し寄せた。八百八島と呼ばれる名勝が、地震と津波によりいくつもの島の外形が変わった。遊覧船から見た小藻根島の「くぐり抜ければ長生きする」と言い伝えがある大きな空洞（長命穴）は崩落し消失した（写真）。



（長命穴 上は震災前 下は震災後）

ドウラン島は斜め半分が欠け、材木島は全壊した。有名な仁王島に損傷はなかった。

松島湾内に点在する島々が津波の緩衝体になったとみられ、松島は周辺地域に比べて津波の被害は少なく、独特の景観も大きくは損なわれなかった。国宝・瑞巖寺は参道まで津波が押し寄せたが、廊下の壁がひび割れる程度で大きな被害はなかった。沿岸道路沿いに並ぶお土産店や飲食店は一階部分が泥水や瓦礫に侵されたが、ゴールデン

ウィークには以前の姿を取り戻した。

懇親の宴で盛り上がったホテル「一の坊」は震災に持ちこたえて、全国からの復興支援企業の宿泊所として利用されている。藤田喬平ガラス美術館は被害が少なく開館待ち状態である。美味しかった海鮮丼の「魚長亭」は泥水等に侵されたが、早々と特別メニューで営業している。美しい島と穏やかな海は残った。被害がその景観にはあまり及んでいない事を知り安堵した。

地震発生時、私は山形自動車道で仙台から山形へ向かっていた。突然ハンドルがあらぬ方向に引っ張られると同時に、目の前の景色がグラグラと揺れ始めた。急いで路肩に車を止めたが、車はまるで時化に合った船のように上下左右に大きく揺れた。揺れの強さよりもその長さにただならぬ不気味さを感じた。無事に山形に辿りついたが、市内は停電のため信号機が消えて、交差点の通過は怖いものがあった。その夜は一晩中続いた余震で寝つけなかった。一日の停電を経て、テレビやネットで自分の勤務地域が津波に呑み込まれる映像を見て、想像を絶する災害の大きさに言葉を失った。その場にいなかつた安堵感よりも、一人だけ逃げてしまったようなひどい罪悪感に苛まれた。決して忘れる事はないだろう。毎日どこかで何かが変化している2010松島の旅路である。

注：この原稿は「2010 杜の都への旅」代表世話人佐々木正寿先生の担当であったが、体調不良と言うことで、代役として執筆させて頂いた。

追記：1年前お元気に「日本三景・松島」をご案内頂いた代表世話人（FAR役員）の佐々木正寿先生が、10周年記念誌へ「東日本大震災後の松島」について寄稿準備中の6月、体調を崩され入院されました。ひたすら回復を願っていましたが、平成23年9月26日8時45分に肺癌のためご逝去されました。観光ポイントではひょうひょうとした佐々木節に皆が聞き惚れていたことや懇親会で笑顔をたやさずお話されていた姿が思い出されます。先生はお見舞いのおりに「そのうちキチンと挨拶にいきますから」と言われました。その言葉を忘れる事はできません。ご冥福をお祈り申し上げます。

この10年間 心に残る想い出

服 部 繁

昭和14年から海軍衛生科員として、主として呉海軍病院にて放射線の職務についていた。そしてこの職を終生の職業にしたいと考えていた。

以後 平成11年11月総合大雄会病院を退職するまでの60年間(80歳)、継続してこの職にあつたことは幸いでした。そして退職以後も日本放射線技師会員として、日進月歩の医学医療に关心をもって、一方では技師会の動き、社会の動きを注意深く見守る昨今であります。

平成16年11月25日、日放技から「終身会員」の資格習得者として恩恵を賜りました。そしてさらに平成22年1月1日、FAR会から米寿(88歳)を過ぎたとして終身「名誉会員」として推戴状を賜りました。両会からこのような栄誉を賜り、唯々感謝、感謝の他なく、このことは私の心に残る一番の想い出となっております。

次に、想い出すのは「呉海軍病院」の事柄です。呉海軍病院は明治22年に創設、昭和20年8月15日終戦にて進駐軍に接収されたが、昭和31年に返還され、同年10月1日国立呉病院として発足する。平成18年10月1日、創立50周年を迎える。病院名は国立病院機構「呉医療センター」と変り、呉海軍病院は見事に生まれ変わった。そして高度総合医療施設として、中国がんセンターを併設し、さらに中国ロックの中核病院(700床)として中国地方の重要な存在となるに至りました。

近代化した呉医療センター敷地内の一角に、呉海軍病院時代を偲ぶ唯一の場所として「呉海軍病院跡」碑が存在いたします。



この跡碑建立を企画完成させた同愛会(旧呉鎮守府管内に在籍した医療、衛生関係者の同窓会風親睦団体)の会長として50周年記念式典に招待されたときの感慨は格別で、私の心に残る想い出の一つであります。なお、跡碑建立の寄金者は655名で、平成元年3月11日に完成記念行事を行った。

同愛会は昭和37年に発足、昭和47年から会誌「同愛」第1号の発刊が始まった。以後、平成22年12月には第40号(152頁)を記念誌として発刊、会員に配布のほか、毎号を国立国会図書館その他関係方面に贈呈いたし、多少でも国家社会に貢献出来ていると思っております。

また、同愛会と関連する3団体(横鎮の赤心会、佐鎮の佐病会、舞鎮の同心会)でも例が無くこの現実は会員各位からの絶大なるご支援とご協力にあつたと思っております。会誌「同愛」第40号記念誌を発刊できたことは、私の心に残る想い出の一つとなっています。

技師 三代になりそうです

小倉佐助

FAR会設立10周年おめでとうございます。私も本年6月で88歳の誕生日を迎え、子供達がささやかな米寿の会を開催してくれました。



昭和20年9月から始めた放射線技師の仕事も4年前に引退しました。私が仕事を始めた昭和20年頃は、技師資格制度の運動期間中で、学会や技師会の会合では「自分の子供は技師にはさせない」という発言がよく聞かされました。昭和26年に診療エックス線技師法が制定され、技師学校卒業の新鋭技師が誕生し、やがて診療放射線技師と改称され、名実共に技師の地位が上がって参りました。

永年の先輩たちの「技師法制定」への努力が実って、学校も3年制から4年制の大学にまで昇格、技師の二代目継承も増えてきました。

私事で恐縮ですが、昭和47年に長女が「技師になりたい」と京都の医療技術専門学校に入学し、3年後に国家試験を受けて、京都市内の病院に約2年間勤務しました。その後に結婚、いまは家庭に入っています。

昭和52年には、長男が“技師になりたい”と言いました。「お前もか、良からう」と大阪大学医療短期大学へ入学、卒業後は京都の病院へ勤務し、今は学会の副代表理事をつとめております。

そして本年4月、孫（長男の息子）が京都医療科学大学に入学しました。これで父子三代、放射線技師一家になりそうです。

FAR会の先輩会員が築かれた【放射線技術学】が、若い技師諸君に引き継がれ、私達は押し上げられました。学会雑誌の論文を見て、理解に苦しむ事もありますが、時の流れについて行けるよう努力していきます。



(後列) 中央:長女(二代目)、右:孫(三代目)

(前列) 中央:筆者(初代)、左:長男(二代目)

心に残る想い出 (プロの厳しさを知った一局)

野原弘基

FAR会創立10周年おめでとうございます。“歳月流るる如し”と言いますが、過ぎゆく速さは年齢と共に、その速度が加速するように感じます。

ここ数年思い出したように再挑戦を始めたのが囲碁です。私と囲碁との出会いは、今から約55年前の高校2年生の時になります。アマチュア5段の級友との出会いがそのきっかけです。彼は囲碁の知識が全くない私に熱心に基本から手ほどきをしてくれました。最初はあまり気乗りしませんでしたが、説明を聞くうちにこのゲームは単なる陣取り合戦ではなく「白黒の石の生存権争い」的な要素をもつことに興味を覚え、囲碁との永い付き合いが始まりました。

本格的に囲碁を楽しむようになったのは、京大病院に就職してからです。職場の同僚に好敵手も多く、入会した病院囲碁同好会には有段者が多く、胸を借りて腕を磨く絶好の機会になりました。また、新聞社が主催する職域対抗戦にも京大ドクターハイエー会の一員として参加する機会を与えられましたが、戦績は散々でチームに貢献することはできませんでしたが、囲碁の奥深さと楽しさがぼんやりと理解できるようになりました。



傍目八目であった今は亡き父から贈られた碁盤は、碁石を打つ時の音の響が良く、その余韻は心に落ち着きをくれる私の大切な宝物です。

林海峰九段の育ての親である関西京都総本部藤田悟郎六段から一度だけ指導碁を打って頂いたことは忘れることが出来ません。



指導碁が中盤まで打ち進んだ時、藤田先生は「この碁は終局です。例えプロが終局まで打ち続けても、2目の差を縮めることは不可能です」と断言されました。その後、指導を受けながら終局まで打ち継ぎましたが、結果は指摘通りの2目差で終わりました。プロの勝負に対する正確な形勢判断と読みに脱帽すると同時に、“プロ”的の厳しさと偉大さを実際に体験することがきた貴重な一局でした。贅肉をそぎ落とした思考回路の中で半目差を競う“プロの世界”的な凄さに敬嘆した想い出は、今も私の心から消えることはありません。

私の永年の目標であった段位免許取得は、2年前に財団法人関西棋院で認定を受け“夢の一つ”を成就することができました。

これからは、また、新しい「人間の素晴らしい旅を創めます。

高速バスの運転手模様

加賀 勇治

FAR 会の入会と同時に山形—仙台間の高速バス通勤を始めた。10年目になる。高速バスの常連客として、運転手の運転しぐさを垣間見て楽しんでいる。私の指定席は左側第1列の1番か2番である。そんななかで気になった運転手を紹介したい。



(座席1番から見える運転手)

- ◆ A運転手：快適運転手の筆頭。親近感ある車内アナウンスが素敵。エコーがかかり気味で、車内がカラオケルームみたいな雰囲気に。運転はとてつもなく上手い。車線変更もしていないかのごとくスムーズで、乗客に全く不快感を与えない。安心して眠れる運転手。降車時の挨拶も丁寧で、こっちも「また乗せて下さい」と言いたくなる。
- ◆ B運転手：ヨシヨシ君。標識、信号、歩行者、ミラー、車線変更など安全確認のたびに、「ヨシー」「ヨシー」と連呼する。ひっきりなしに「ヨシー」「ヨシー」と耳に入り気になるのに「ヨショシー」なんて言うものだから、「ヨシーは1回でいい」と言ってやりたくなる。「ヨシー」の発音は明瞭だが、肝心の車内アナウンスは何を言っているのかわからない。
- ◆ C運転手：ふくよかな好人物。早朝の便で会うことが多い。とにかく速い。でも、それほど危険に感じないところがプロ。無茶なことは絶対しない。

ところが停留所のあまりに手前で降車ボタンを押すと「何かご用？まだ距離がありますよ」とやんわり怒るところは、普通のオヤジ。

- ◆ D運転手：無頓着な若手。今のところ乗りたくない運転手の一人。おそらく路線の中で最も運転態度が悪い。乗客の乗降時に一言も発しない。車内アナウンスもなし。車線変更のハンドル切りが粗い。ギアシフトも乱暴。交差点に進入して突然ブレーキをかけたことも。流石にここまでやられると「若いね」では済まされない。クレーム電話まで秒読み段階かと思ったが、最近見かけない。
- ◆ E運転手：ノロマ君。法定速度を下回る巡航速度。後続車に抜かれることはあっても、追い抜くことはない。追抜いた車は前方に小さくなるどころか、瞬時に見えなくなる。帰りの便で彼のバスに乗ると、家内の顔を見るのが10分遅くなる。頑張れノロマ君。

- ◆ F運転手：氏名不詳。何か後ろめたいのか、ネー



ムポートを付けずに乗務。何度も朝の便に搭乗。制帽はやや斜めに浅く着用。グローブは気合の茶色。かなり職に酔っている様。運転はとても上手い。アクセルもブレーキも最もスムーズ。車内アナウンスは全くテープを使わずに、終始甘い声で乗客を癒してくれる。希少な心地良い運転手。

懐かしの写真集

情報誌、記念誌で余りお目にかけなかった写真を中心に

神戸
(2002)



松江
(2002)



鎌倉
(2003)



男鹿
(2003)



湯河原
(2004)



高雄
(2004)



鴨川
(2005)



薩摩
(2005)



初芳鮨
(2006)



北海道
(2006)



初芳鮨
(2007)



伊勢
(2007)





この写真集は、各懇親会世話人のご協力により出来上りました。当初は情報誌、記念誌に掲載していない、皆さんがアット驚かれる写真のみを載せるつもりでしたが、一部の写真が重複掲載になってしまったことをお詫び申し上げます。

なお写真の蒐集に当たり、特に小川敬壽先生、懇親会のCD纏め役である山総務委員長、そして山田編集委員長には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

(選定：四宮恵次)

第三章 FAR会10年間の記録

(詳細は情報誌 各号を参照ください)

3.1 FAR会 運営記録

3.2 FAR会 懇親会記録 (印象記)

3.3 FAR会 情報誌の発行記録

3.4 FAR会 会員名簿

3.5 FAR会 規約・細則

(付: 協賛募金ご芳名、協賛広告)

3.1 FAR会 運営記録

年 度	特 記 事 項	会 員 数	会 長	副 会 長	庶務会計会計監査会計監査(員)	總務(員)	備 考	そ の 他 の 世 話 人
平成13年	FARI設立、情報誌創刊	98	橋本 宏	山田勝彦川上壽昭	吉萬元慶後藤正季木村千明小川敬義四宮憲次	前越 久野原弘基		
平成14年	事務局移転(JRST事務局移転)	103						
平成15年		107	橋本 宏	山田勝彦川上壽昭	福西勝司後藤正季木村千明小川敬義四宮憲次	前越 久野原弘基 山田和美倉西	旗加賀男治丸山米三	
平成16年	情報誌カラーハード	101						
平成17年		98	橋本 宏	山田勝彦川上壽昭	福西勝司後藤正季木村千明小川敬義四宮憲次	前越 久野原弘基 山田和美倉西	旗加賀男治丸山米三	
平成18年		100						
平成19年		94	橋本 宏	山田勝彦川上壽昭	福西勝司平林久枝木村千明山田和美四宮憲次	前越 久野原弘基 小川敬義倉西	旗加賀男治石井勉	
平成20年		93						
平成21年	規約の全面改訂、細則の制定	92	橋本 宏	山田勝彦川上壽昭四宮憲次	福西勝司平林久枝木村千明山田和美石井勉	前越 久野原弘基 小川敬義倉西	旗加賀男治山清美	
平成22年	ホームページ開設、メールアドレス制定	97						
平成23年	10周年記念事業の実施	-	橋本 宏	山田勝彦川上壽昭四宮憲次	平林久枝木村千明山田和美石井勉	前越 久野原弘基 小川敬義倉西	旗加賀男治山清美	旗加賀男治山清美

注)会員数は「各年度の収支決算書の会員費収入」より算出。

3.2 FAR会懇親会記録

年 度	月 日	懇親事業	場所	会場名	宿泊	参加者数	金員参加費	懇親会実行事	
								後藤	木村
平成14年	4.5	発足記念パーティ	神戸	三宮ターミナルホテル	×	42	5,000	北野地区異人館めぐり 散策	
	10.19	松江と出雲の旅	湯元	湯の川温泉	○	29	16,000	松江城懸垂を船遊、出雲大社等	川上 木村
平成15年	4.13.	古都 錦鏡散策	備 舟	日本	×	20	3,000	錦倉 社寺ウォーク	四宮 小川
	10.11	男鹿の集い	男 鹿	男鹿観光ホテル	○	25	17,000	入道崎、豪風山、ノ郎瀬など散策	加賀 木内 有馬
平成16年	4.10	箱根・湯河原の集い	湯河原	水月旅館	○	26	15,000	横浜よりバスにて箱根経由	木村 四宮 小川
	10.23.	京都 高辻の集い	高 辻	もみじ家別館	○	32	23,000	神護寺付近、紅葉系散策、	山田 野原 山
平成17年	4.01	安房 鴨川の集い	木更津	オクラガラヂミーホテル	○	24	23,000	鴨田デイカセシア・バス遊覽	小川 山田 速水
	10.22.	薩摩の集い	鹿児島	指宿ロイヤルホテル	◎	25	35,000	知覧等バス遊覽、2日目、霧島13名	山田 木村 下野 中村
平成18年	4.08	2006 FAR懇親の夕	横 浜	初芳鮨	×	37	6,000	—	四宮 小川 萩原
	10.21	2006 北への集い	定山渓	グラートホテル端町	○	24	20,000	小樽運河、豊平峡、支笏湖など散策	柴田 萩原 菊池 木村
平成19年	4.14	2007 FAR懇親の夕	横 浜	初芳鮨	×	32	6,000	—	石井 萩原 木村
	10.27	2007 伊勢心のふるさとの旅	鳥 羽	ヒューホテル花菖蒲	○	24	23,000	伊勢神宮 正式参拝、おかげ横丁散策	前屋 山 木村
平成20年	4.5.	2008 FAR懇親の夕	横 浜	龍鳳酒家	×	33	7,000	—	萩原 山 飯山
	10.25	2008 銀井沢、高津への旅	高 津	ホテル高松	○	17	25,000	高津山道や、白根山など散策	小川 萩原 四宮
平成21年	4.18	2009 FAR懇親の夕	横 浜	初芳鮨	×	27	6,000	—	小川 萩原 藤田
	10.24	2009 美作 湯郷への旅	美 作	季譜の里	○	15	20,000	岡山 後楽園を散策 (OP)	川上 金山 森
平成22年	4.10.	2010 FAR懇親の夕	横 浜	美濃吉	×	35	6,000	—	萩原 森
	10.16	2010 松江の都への旅	松 島	一の坊	○	18	20,000	松島観光船にて島々を遊覽 (OP)	佐々木 加賀 木内 有馬 藤田

3.2 懇親会記録（印象記）

2002.4.5. 「発足記念パーティ」

2001年に発足したFAR会を記念したパーティは、三宮ターミナルホテル4階ラウンジを借り切って行い、記念撮影（情報誌3号参照）後、時間の経つのを忘れて懇談した。

特に印象に残るのは、午前中、有志13名が参加して行われた「北野地区異人館めぐり」である、世話人の石山忍氏を中心とした市民ボランティア4名のガイドには“神戸での総会は6回目だが、初めて昼間の神戸を散策した。本当に良かった”という声が聞かれたが、迷路のような細い坂道を女性ボランティアと手をつないで歩く橋本会長の姿も印象に残るものであった。

2002.10.19～20. 「松江と出雲の旅」

19日は堀川めぐり、11時に松江城大手前発着場に集合した19名は、2艘の船に分乗しのんびりと城堀を一周したが、その後の昼食「出雲そば」は見ものであった。蕎麦の味は言う迄もないが“少々食前酒を”が、店の酒が空になるのではないかと心配したものである。その後、出雲大社に参拝し神々しい気持ちとなって日本三美人の湯「湯元湯の川温泉」へ向かった。暫く振り、同じ屋根の下での一泊懇親会は、齡を忘れ、夜の更けるのも忘れ、延々と続いたことは記念すべきことと思われる。

2003.4.13. 「古都 鎌倉散策」

ウォーキングに興味のある14名の方が北鎌倉駅に集合、童謡に謡われている「円覚寺、建長寺を経て鶴岡八幡宮」などを散策。その後、そば処「峰本」の懇親会に移行した。丁度“鎌倉まつり”が開催され、マーチングバンドから神輿の運行などを2階のお座敷から見ているうちに、町中お祭り気分に同化し、大変な盛り上がりを見せたことである。

2003.10.11～12. 「秋田 男鹿の集い」

現地世話人の申されることは良く判らないが、調査は種（酒）と環境にあるようだ。ホテルの懇親会は、肴は（海の幸鍋）、最初の種は浦霞禪（仙台）、続いて越の寒梅（新潟）であつと言う間に種切れ、その他は省略とある。交流・触れ合いは抜群で丑三つ刻まで続いたとのこと。翌日の環境調査は、北緯40度の入道崎、続いて4つのマール・火山湖を望める展望台、更に男鹿の展望台、寒風山で360度の展望を満喫し、八郎潟干拓地、入道崎をバスから望みながら、年齢、貫禄充分なガイドの正調秋田イントネーションを子守唄としながら秋田駅へ向かった。

2004.4.10. 「箱根・湯河原の集い」

水月の迎えバスで横浜を出発したが、絶好の行楽日和が災いし、道路事情の関係から東名→箱根→湯河原のコースを取るに至った。途中、箱根大観山（1,011m）の展望台では、富士山がちらりと顔を見せ、特別参加の中国影像技術学会の燕、李先生は大感激、車中の懇親も充分出来上がり、日本旅館の水月に到着した。夜の懇親会は用意のカラオケには見向きもせず、連夜の学会、懇親会、バス内の活躍が嘘のような元気には誠に恐れ入った次第であった。

2004.10.23～24. 「京都 高雄の集い」

大阪での学術大会に関連して、紅葉の山里として有名な創業、明治40年という合掌造りの料理旅館「もみじ家別館」で開催した。

秋たけなわの京料理を味わい、杯を交わしながらの昔話に宴も盛り上がった。なお特筆すべきは、懇親会始まって以来の寸劇「新撰組 in FAR」が演じられたことである。配役は山田勝彦、山哲男、野原弘基、川上寿昭、金山敬典、木村千明、福西勝司、清水久子の諸氏、演出は

山田勝彦（実態は某女史らしい）。聞く所によると、小道具は太秦の撮影所から借りてきた本物であったとのこと（情報誌11号参照）。注：17時56分に大きな揺れを感じた。この地震は新潟県中越地方を襲った震度7、M6.8の直下型地震で、死者68人、負傷者4,805人という忘れ難い夜であった。

翌日は神護寺付近を散策、かわら投げを楽しみ、参道途中の「紅葉茶屋（田中龍蔵 JSRT理事のご実家）」での棧敷席で紅葉と松茸・うどんすきを満喫し、ジャンボタクシーに分譲して京都駅に向かった。

2005.4.10. 「安房・鴨川の集い」

迎えのバスはアクアラインを通って東京湾を横断、天気晴朗なれども風強く、バスはぐらぐら、海辺のリゾートホテルのような「亀田メディカルセンター」を見学した後、ホテルへ、そして、懇親会は中国料理とカラオケで盛り上った。翌日は生憎の雨、安房勝浦の誕生寺などを散策し、アクアライン海ホタルで昼食、持ち込んだビール、焼酎で出来上がり、羽田で無事解散した。

2005.10.22～24. 「薩摩の集い」

「折角、鹿児島まで行くのなら一泊では勿体無い」との意見から2泊の旅が実現した。「うまか焼酎を久つかぶいに飲んもそ」に誘われて先ず知覧へ、知覧特攻平和会館では夫々の想いを抱きつつ参観した。しかし、指宿へ向かう途中の山間道路でバスのトランクが開き、荷物が散乱してしまうハプニングが発生した。

指宿と言えば砂風呂、宿への到着を待ちかねてシャトルバスに飛び乗り半満喫したようであった。夜の懇親会は、現地の下野大先輩、中村夫妻の暖かい支援もあり、昼間の騒ぎも何処吹く風、焼酎宴を満喫した。

第2日の行動は17名、開聞岳を車窓に見て、

フェリーで櫻島へ、そして黒酢工場などを見学して、一路、霧島温泉へと向かった。霧島の硫黄温泉で肌がつるつる、そこへ焼酎が入り、他の宿泊客も少なく貸し切り状況の中で何となく静かな夜を過すことが出来た。

第3日は暇人13人、えびの高原、霧島神宮で森林浴を満喫、薩摩ビール園で昼食、さらに空港では反省会を開催してから空の人となつた。

2006.4.8. 「2006 FAR懇親の夕」

川上副会長より“しばらく春の学会は横浜で続きそうだが、地元の方々にこれ以上の負担（一泊）を掛けることは申し訳ない。春は懇親の場、秋は開催地にあわせた懇親の旅（泊）にしたら”との役員会での承認に基づいて実施した。

初芳鮨は、魚屋さんも飲みに来る、場所も「知らないタクシーの運転手はモグリ」と言われる有名な店で、“煮物の鮨・お造りの盛り合せ・鮨のたたき・海老の塩焼き・・最後にはにぎり鮨・伊勢海老の味噌汁”と続くとギブアップが続出し、大満足で宿へ戻った。

2006.10.21～22. 「2006 北への集い」

札幌コンベンションセンターから一路小樽へ、運河沿いを思い思いに散策、夫々ご満足で札幌湖を経由して、楽しみな定山渓に向かった。地元世話役の方々が事前に苦労されたのが酒の銘柄と量であったらしい。“お酒の好きな先生が多いらしい”との情報も、一次会で二次会用に用意していた酒に手を付ける状態に、世話人が手分けをして売店に走りましたが、地酒はなく、温泉街の酒屋を走り回ったとの事です。

翌日は、途中でハイブリッドバスに乗り換えて豊平峡で紅葉を鑑賞、さらに北海道芸術の森にて「北の大地」と夫々好みの芸術に触れ、大満足に支笏湖湖畔での昼食、萩原世話人の名ガイドに感謝をしながら新千歳空港に向かった。

「萩原世話人の総括」：一次会で約5升、二次会で2升、そして昼食時には徳利が20本、約20人でこれだけ飲みっぷりの良いこと、お酒を用意した者にとって爽快感がありました。（感謝、感謝・・・）

2007.4.14. 「2007 FAR懇親の夕」

昨年好評の初芳鮓で開催、“最後に出された鉄火巻・マグロの握りがたべ切れなくて残してしまった”と翌日恨めしそうな感想があったと聞き、今年は再挑戦と意気込んだが、結果は昨年と同様で、残り物をホテルでの二次会に持ち帰られる方もおられた。

なお、飲むことと喋ることは別口であり、皆さん益々元気であることはご同慶の限りです。

2007.10.27～28 「2007 伊勢心のふるさとの旅」

日本の神様の基締め、お伊勢さんにお参りしよう。と言うことで企画した訳です。学会場から伊勢街道を一路お伊勢さんへ、予定を変更して先ず二見が浦へ、夫婦岩は台風一過の大波に洗われて近づけずに早々とホテルに向かう。海を見下ろす露天風呂でさっぱりし、恒例の懇親会に向かう。バスの中で「明日の伊勢神宮正式参拝では、スーツ・ネクタイ着用、酒臭い人は入場制限あり」などと脅されていただけに、12時前には各部屋へ戻られたはずだが、その後三次会をやられたとも聞いている。

翌日は先ず内宮参拝、五十鈴川で心身を清め、世話人のチャンネルを利用しての手続きから「南玉垣御門内」での正式参拝が出来た。さらに神楽殿にて FAR会としてお神楽を奉納した（本来はお神楽を奉納してから参拝）。その後は清清しい気持ちで「おかげ横丁」を散策、老舗のすし久にて「匂のかつお料理、てこね寿司」で腹一杯になり一路名古屋を目指した。

2008.4.5. 「2008 FAR懇親の夕」

人間は何と贅沢な。今年は「お鮓以外で」との声に動かされ、考えてみれば FAR会として“横浜の中華街には足を入れていない”ことに気付き、地元で味と値段を充分ご存知の萩原さんが保証付の「龍鳳酒家」で開催した。

懇親の宴は、何の制約もなく、中国からのお客さん4名を含め、会話とお酒が行き交わった。隣席そしてそれを跨いで隣卓との情報交換、近況、噂話などに話も弾み、明日の朝が心配になってきた9時過ぎに散会、多少飲みすぎの身体に心地良い風を受けて帰路についた。

2008.10.25～26 「2008 軽井沢・草津の旅」

“草津よいとこ、一度はおいで～”今回の目玉は、軽井沢から離れ、紅葉と温泉（酒）の旅であったが、どうも紅葉よりお酒の方に期待があるよう感じられた。

先ず、紅葉真っ盛りの白糸の滝、次に対照的な鬼押し出し、225年前の浅間山大噴火の名残、溶岩原野の遊歩道を散策し、一路草津温泉へ向かった。草津ではドテラ姿に下駄履きで湯畠を見学したり、温泉街をぶらり・ぶらりと思っていたが時間の関係で取止め、専ら宴会へ専念。しかし宴会、二次会となると皆さん若返ったように元気になられるのには正直驚かされた。

翌日は、標高約2,000m白根山の湯釜（標高差？）へ、バスガイドの心配をよそに無事帰山、帰りは軽井沢に戻って信州信濃の新そばを賞味し、いろいろな疲れを感じながら帰路についた。

2009.4.18. 「2009 FAR懇親の夕」

昨年の中華料理は齢の所為か、濃厚な味に胃腸が対応できなかったのか、今一つ余韻が残らなかった。と言う反省と、浮気をすると前の良いところが想い出されるのか判らないが、“量を減らして初芳鮓でやろう”と言うこととなっ

た。何時もと違う点は、事務局の美人女性3名が加わり、華やいだ雰囲気の中で穏やかに進行したが、話題もお互いの健康や消息のない方への関心が強く、酒量も減ってきたことから高齢化が徐々に進んでいることを肌で感じた。

2009.10.24～25 「2009 美作・湯郷への旅」

美作には「陶芸体験や宮本武蔵の里」などの見所は沢山あるが、今回は下見の結果、温泉に絞った旅とした。学会場から迎えのバスで1時間30分、男の仲間では少々勿体無い素晴らしい宿に着いた。早速温泉三昧と行きたいところだが、役員会でビッシリ。総務が恨まれることになった。懇親会、二次会は何時もの通りで特記すべきことはなかった。

翌日は、オプションである天下の名園、後楽園へ、結果的には全員参加となり、親しき仲間との散策に感慨を覚え、予約済みの昼食会では余ったビール・酒を無理に分配して解散した。

2010.4.10. 「2010 FAR 懇親の夕」

横浜、ランドマークタワーからパシフィコ横浜までの桜通りには、今年も満開の桜が迎えてくれた。学会場の近場で足が伸ばせる会場を、との我が儘な希望を叶えていただき、ランドマークプラザにある京料理「美濃吉」に35名という記録的な参加者となった。

お世話をいただいた萩原先生から100本しかないというプレミア付き銘酒「たていわ」、女性杜氏の作という「19」を皆で愛でる中、酒量の進むこと。大きく予算超過となる始末でしたが、たくさんの方から御祝儀をいただき大いに盛り上がった横浜の夜だった。

2010.10.16～17 「2010 仙台・松島の旅」

あまりの美しさに芭蕉が絶句したという松島の旅は、お天気にも恵まれて期待通りの旅になった。

マイクロバスで宿に向かう途中、最眺望スポットからの松島の美しいこと、言葉を失った。

宴の宿「一の坊」は、有名な加賀屋ホテルよりも評価が高いという素晴らしいホテルでた。

ホテルの隣接にある「藤田恭平ガラス美術館」では、心を洗われる色と形の各展示品に感動した。

そして、何と言っても温泉、露天風呂からの朝日が名物でしたが、前夜のお酒で起きられなか人も多数でした。

翌日は塩釜までの遊覧船の旅、餌に寄ってくる鷗に癒されながらの50分でした。塩釜の市場では鮮度の良い魚介類が破格の値段で入手でき、「ここに住みたい」と思ってしまいました。

3.3 情報誌の発行記録 (FAR会の記事、案内、情報などを除く)

創刊号 平成13年9月20日発行、14頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
巻頭言	21世紀の新しい交流の場…FAR会	橋本 宏
	FAR会の発足に寄せて	川村義彦
	本会設立への経緯	前越 久
特集	会員の近況とご趣味	(編集委員会)

第2号 平成14年1月31日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
投 稿	日本「神代」の歴史は創作神話である	井上喜代太
	一人旅の楽しさ	飯塚芳郎
	読書は得意でないけれど…	雄川恭行
	春未だ遅し	川上寿昭
	2001年の私ごと大事件	木内繁夫
	電話・厨房・時	斎藤一彦
	温泉を楽しんだ2001年	遠山坦彦
	全てを受け入れて	中村純雄
	「毎日が日曜日」の夢	山 哲男

第3号 平成14年5月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
投 稿	ごあいさつ	橋本 宏
	FAR会発足記念パーティの一寸裏話	木村千明
	神戸・北野地区異人館めぐり	石山 忍
	FAR会の異人館めぐり	山田和美
	放射線技術一家になりました	小倉佐助
	三億円の夢	前越 久
追悼文	旅立ちにもoriginalityを求めた森先生を悼む	雄川恭行
寄 稿	『日本酒の話…その1』 日本酒の製法	(編集委員会)

第5号 平成15年1月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
特 集	神々が集う10月(神在月)	小松明夫
	「私の健常法」	『企画:前越』
	死の淵から蘇って8年目	前越 久
	ウォーキングの薦め	四宮恵次
	散歩	厚東正之
	水泳	稻津 博
	私の健康と福祉	勝浦秀雄
	私の有酸素運動	大塚昭義
	椎間板ヘルニアとテニス	丸山米三
作品紹介	剣道と私	葉山孝行
	昭和の思い出と剣道	岡本日出夫
	ヨット	喜多村道男
	(写 真)	中村純雄
連 載	(書)	松田重勝・長沢 弘
	有酸素運動とは? (その一)その効用	大塚昭義

第6号 平成15年5月15日発行、14頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
特 集	ごあいさつ	橋本 宏
	『私の健常法・長寿の秘訣』	『企画:木村』
	私の長寿の秘訣	大竹純一郎
	FAR会員の皆様	豊浦久明
	楽しみながらウォーキング	長岡新六
	私の長寿の秘訣	中間光雄
投 稿	もっとゆっくり、今を	服部 純
	古いの体験	吉田 弘
追悼文	水泳と月謝	山田勝彦
	囲碁	酒井尚信
連 載	高木達一朗先生を悼む	川上寿昭
	有酸素運動(その2) ウォーキングについて	大塚昭義

第4号 平成14年8月30日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
投 稿	古代浪漫の宝庫 出雲での再会を楽しみに	川上寿昭
	心に光を得て	青木重秋
	ゴミの話	吉富元康
	夏の夜の宴	鹿沼成美
作品紹介	都心生活5ヶ月	清水久子
	(俳 句)	西村信男・中村 稔
	(写 真)	小松明夫・須山正一
寄 稿	(絵)	遠藤俊夫
寄 稿	良い酒悪い酒の意味悪な見分け方、ほか	(編集委員会)

第7号 平成15年9月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執 筆 者
特 集	皆さんあってのFAR会	山田勝彦
	『定年を過ぎてからのパソコンライブ』	『企画:山田』
	私はパソコンの楽しみをまだ知らない	国井立志
	苦あれば楽あります将来に	砂屋敷 忠
	暇つぶしにはもってこいの道具です	段床嘉晴
	パソコン活用の楽しみ	遠水昭雄
作品紹介	○○才の手習い	平林久枝
	夢の無線LAN導入への挑戦	森 克彦
	(書)	金山敬典
連 載	(写 真)	段床嘉晴
	(絵)	吉富元康・中村純雄
	私の「山形そば風土記」その1	木内繁夫

第8号 平成16年1月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FARの楽しみ	川上寿昭
特 集	“食い道楽”	『企画:小川』
	美味しいことは、よいことだ	遠藤俊夫
	ふぐと私	久住佳三
	平湯の宿の朝ごはん	斎藤一彦
	手前みそ柚木珍味	島田裕弘
	私の「食」あれ、これ	清水久子
	納豆との出会い	前越 久
	夢食う虫も好きすぎ	山本楓恵
寄 稿	私の考案席	高尾義人
作品紹介	(写 真)	段床嘉晴・砂屋敷忠
連 載	私の「山形そば風土記」その2	木内繁夫

第12号 平成17年5月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FAR会の楽しみ	橋本 宏
特 集	“友…この得がたき人びと”	『企画:木村』
	老年期の友“こけし”	有馬宏寧
	高校同期生6名→教師となる	大塚昭義
	ともあり遠方よりきたる一有朋自遠方来	垣内三郎
	木村和文先生との出会い	久住佳三
	故郷の忘れ得ぬ友	原東正之
	親 友	柴田崇行
	60才からの趣味の友	篠田俊治
	眞の友	萩原康司
	人生至る処友人あり	松本 健
寄 稿	35回純金で事務局職員が初めて出張	清水久子
連 載	八十八ヶ所靈場巡り(3)土佐路の眺望26~28番	遠山坦彦

第9号 平成16年5月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FAR会で楽しく	橋本 宏
追悼文	故 飯田 昇さんを語る	四宮恵次
特 集	“今から話せるヒヤリ体験”	『企画:前越』
	治療用輪潤力プセルの破裂	牧野純夫
	生死の境目 危機一髪	後藤正季
	経験不足が招いた「ヒヤリ」	小山一郎
	医療事故思考	斎沼成美
	私の“肩こり”解消法	前越 久
	必 質	岡本日出夫
	(写 真)	段床嘉晴
作品紹介	(絵)	山田和美
連 載	四国八十八ヶ所靈場のご案内	川上寿昭

第13号 平成17年9月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	「藍廟の無い」へのお説い	山田勝彦
特 集	“楽しい語らいのタベ”	『企画:倉西』
	定年の風景	金山敬典
	独りごと	木内繁夫
	コンペの反省会	篠田俊治
	アシックス鬼塚喜八郎会長の話を聞いて	高尾義人
	「楽しい語らいのタベ」に寄せて	山岸一雄
	井上喜代太先生を偲んで	後藤正季
	ただ今医学・医療新時代の夜明け—その3	雄川恭行
	ありがとうございました	清水久子
	思いのまま	長澤 弘
作品紹介	(写 真)	遠山坦彦
	(絵)	中村純雄
連 載	八十八ヶ所靈場巡り(4)土佐路の眺望29~36番	遠山坦彦

第10号 平成16年9月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	京都へのお説い	山田勝彦
特 集	“今から話せる楽しい学会臺話”	『企画:小川』
	想い出深いジョイントミーティング	四宮恵次
	呑んで語ってまた呑んで、第21回秋季大会	砂屋敷 忠
	ただ今医学・医療新時代の夜明け?	雄川恭行
	(絵)	中村純雄
	四国八十八ヶ所靈場巡り(1)スタンブラー1~11番	遠山坦彦

第14号 平成18年1月15日発行、12頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	新しい年を迎えて	川上寿昭
特 集	“ここが良かった我が職場”	『企画:前越』
	思い出に残る機器	有馬宏寧
	優秀なスタッフに恵まれて	大塚昭義
	ここが良かったわが職場	段床嘉晴
	自分にして欲しい事をしてあげなさい	吉田 弘
	近畿一円の職場	若松孝司
	(写 真)	遠山坦彦・段床嘉晴
	(絵)	中村純雄・山田和美
	八十八ヶ所靈場巡り(5)弘法大師は 37~43番	遠山坦彦

第11号 平成17年1月15日発行、16頁 編集委員長：小川敬壽

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FARの楽しみ	川上寿昭
特 集	“長寿の秘訣…いつまでも元気に過ごすために”	『企画:後藤』
	長寿の秘訣	井上喜代太
	意 し	岡本日出夫
	生涯三万日をを迎えます	小倉佐助
	これからも身体障害者のために	勝浦秀雄
	私の喉づぶし	津田元久
	気楽に、前向きに、好奇心を輝かせたい	服部 繁
	ただ今医学・医療新時代の夜明け—その2	雄川恭行
	東北での学会を偲ぶ	遠藤久勝
	(新作劇)新撰組 in FAR	清水久子
連 載	四国八十八ヶ所靈場巡り(2)ドライブコース12~25番	遠山坦彦

第15号 平成18年5月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	いかがお過ごですか	橋本 宏
特 集	「今 楽しいこと」	『企画:小川』
	親子旅	飯塚芳郎
	孤独に夢中	加賀勇治
	人生の達人思考	鹿沼成美
	爽やかな圖志	中村純雄
	ゆったりと時を過ごす	前田幸一
	家族と教え子	山本義憲
	テレビ魅惑	吉富元康
	(写 真)	皮床温明・遠山坦彦
	八十八ヶ所靈場巡り(6)伊予路の 44~51番	遠山坦彦
作品紹介		
連 載		

第19号 平成19年9月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	悲しいことが続きます	山田勝彦
特 集	『衆 頭』	『企画:山』
	地方からの発信 ~耳の痛い話~	川上寿昭
	私のおもちゃ箱	佐藤孝司
	私の趣味と自慢の記録	土井邦雄
	お礼とご挨拶	藤田 透
	最近 学んだ事	松井美穂
	大谷莫尚 先生を聴んで	平林久枝
	石山 忍さんのご逝去を悼む	山田勝彦
	八十八ヶ所靈場巡り(10)広さで圧倒 75~82番	遠山坦彦
連 載		

第16号 平成18年9月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FAR企画5年を振り返って	山田勝彦
特 集	「心の宝物」	『企画:野原』
	サークルで出会った大切な方々	草山泰子
	転ばぬ先の杖	志村元久
	人生で得たもの	松本 進
	セビア色の家族写真	山本英明
	(写 真)	清水久子
	中欧旅行の写真	山 哲男
	八十八ヶ所靈場巡り(7)東伊予路の 52~59番	遠山坦彦
作品紹介		
寄 稿		
連 載		

第20号 平成20年1月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	神宮の莊厳さに心洗われました	川上寿昭
特 集	「心に残る旅の思い出」	『企画:柴田』
	憧れの札幌航路	長澤 弘
	第22回鹿児島学会(その1)	中間光雄
	一度行って見たかった町	萩原康司
	田舎のレストランで聴いたハッピーバースデー	山田和美
	(写 真)	山 哲男
	中欧世界遺産の旅(その1)	萩原康司
	八十八ヶ所靈場巡り(11)結願めざし 80~88番	遠山坦彦
作品紹介		
寄 稿		
連 載		

第17号 平成19年1月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	亥年のごあいさつ	川上寿昭
特 集	「私の趣味」	『企画:加賀』
	出版との付き合い	四宮恵次
	日 常	木内繁夫
	独楽コレクション	萩原 明
	もの作りの楽しみ	松本 進
	素敵な仲間	清水久子
	物好きと言われる旅	平林久枝
	秘湯めぐり	飯山清美
	松本 健 先生を聴んで	平林久枝
	八十八ヶ所靈場巡り(8)東伊予路の 60~64番	遠山坦彦
追悼文		
連 載		

第21号 平成20年5月15日発行、14頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	また春が遅ってまいりました	橋本 宏
特 集	「終戦から63年…」	『担当:清水』
	よろずのことときあり	神田幸助
	戦時の想い	鳥田裕弘
	広島原爆被災のことなど	砂屋敷 忠
	激励の昭和に生きる	高尾義人
	終戦から63年 本気になろうヨー	中村 修
	私の昭和の63年	吉田 宏
	第22回鹿児島学会(その2)	中間光雄
	中欧世界遺産の旅(ハンガリー編)	萩原康司
	八十八ヶ所靈場巡り(12)最終あがりは高野山	遠山坦彦
寄 稿		
連 載		

第18号 平成19年5月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	今年の雪は少なかったようです	橋本 宏
特 集	「私のお気に入り」	『企画:福西』
	歌謡座茶の愛唱歌全集	厚東正之
	10年前のよき想い出	後藤正季
	お気に入りの店	清水久子
	時間を自分流に	中村純雄
	(写 真)	清水久子
	八十八ヶ所靈場巡り(9)讃岐の道 68~74番	遠山坦彦
作品紹介		
連 載		

第22号 平成20年9月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	真夏の夜の思い出	山田勝彦
特 集	『最近の私』	『企画:松井』
	読書と映画	大塚昭義
	高速バス運動模様	加賀勇治
	50歳の再出発	草山泰子
	銀杏の思い出	萩原 明
	新たな出発	藤田 透
	アマ五段を目指して	前越 久
	中欧世界遺産の旅(オーストリア編)	萩原康司
	八十八ヶ所靈場巡り(13)靈場巡りを終えて	遠山坦彦
寄 稿		
連 載		

第23号 平成21年1月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	丑年を迎えて	川上寿昭
追悼文	青木豊秋先生 ご逝去 (編集委員会)	
特 集	“この頃、腹がたつこと・嬉しいことなど” 年末の忙しいとき うれしかったこと(感慨深く想うこと五話) 電車の中で… 現役時代の仲間たちとの交流 思いがけない入選 この頃、腹が立つこと・嬉しいこと	『企画:平林』 石井 魁 喜多村道男 清水久子 鶴田重彦 中村誠雄 前田幸一
	憎 別	山本義章
	ご当地自慢(その1)道後温泉	川上寿昭

第27号 平成22年5月15日発行、16頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	辛さと悲しみをこらえて	川上寿昭
特 集	“患者を体験してみて” 病気との付き合い方は難しい 脳梗塞闘病記 MRノイズで災難 病気の問題と言われて75年 患者を体験してみて	『企画:鷹田』 大堀昭義 川上寿昭 斎藤一彦 前越 久 松井美樹
	長岡新六 先生を偲んで	(編集委員会)
	木村千明君を偲んで(千明ちゃんとの想い出)	山 哲男
	同門の師 逢森久勝先生を悼む	有馬宏章
	ご当地自慢(その2)名古屋の巻	前越 久

第24号 平成21年5月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	風景る頃となりました	横本 宏
特 集	“あいたい…” ある夜の話 人生の恩師 初恋の彼女に会いたい 欲張りな私 同期の仲間	『企画:飯山』 神澤良明 倉西 誠 後藤正季 鶴田 透 松井美樹
	伊藤 博先生が西方へ旅立たれた	山本義章
	中欧世界遺産の旅(チェコ・ドイツ編)	萩原康司
	ご当地自慢(その2)わが故郷 島根と出雲大社	川上寿昭

第28号 平成22年8月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	初秋の候	横本 宏
特 集	“私のお宝” 好きな曲 チームワーク 私の宝物 私のお宝(クロウの巻) ことば	『企画:神澤』 今井方丈 渋那憲聖 中村幸夫 前田幸一 宮地利明
	近況報告 ブータンの旅	平林久枝
	ご当地自慢 「わが街 仙台」	木内繁夫

第25号 平成21年9月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FAR会の活性化を願っています	山田勝彦
特 集	“私のこだわり” パンを楽しむ 男の色気 収集家 私のこだわり ワインの歴史と共に コーヒー雑記	『企画:草山』 稻井 敏 木村千明 久住佳三 佐藤孝司 萩原 明 吉富元康
	中欧世界遺産の旅(チェコ編)	萩原康司
	ご当地自慢(その2)我が故郷 島根と出雲大社	川上寿昭

第29号 平成23年1月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FAR会も今年は10周年を迎えます	山田勝彦
特 集	“私の健康法” 終生の楽・健康新体操 糖尿病との付き合い ストレスも健康の一節 食事・運動療法	『担当:佐々木』 有馬宏章 石井 勉 神澤良明 倉西 誠
	須山正一先生を偲んで	小松朋夫
	松江の心に触れて	清水久子
	ご当地自慢 「わが街 高根」	後藤正季

第26号 平成22年1月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	FAR会業務のスムースなハントタチを願って	四宮恵次
特 集	“吐 霧” “おひとりさま”について考える 井戸で金魚を見た 女性専用車両の影響 はじめての野菜づくり Windows Home Server導入への喰き	『企画:石井』 飯山清美 神澤良明 草山泰子 佐々木正寿 昇 克彦
	仙人になりそこなった はなし	遠山坦志
	ご当地自慢(その1)名古屋の巻き	前越 久

第30号 平成23年5月15日発行、12頁 編集委員長：山田和美

内 容	テ ー マ	執筆者
巻頭言	はじめに	川上寿昭
特 集	“道 程” 岡崎世代 「女のくせに」から… 聚かり	『企画:森』 渋那憲聖 平林久枝 福西勝司
	ご当地自慢「千葉県兩房巻」	遠水昭雄

3.4 会員名簿 (50音順 2001.04 ~. 2011.05.)

全会員 No	現会員 No.	氏名	住所	入退会年度		ご逝去年月(享年)
				入会年度	退会年度	
1		青木 重秋	福岡県糟屋郡	2001		2008. 08. (88歳)
2	1	有馬 宏寧	宮城県仙台市	2002		
3		飯田 昇	東京都練馬区	2001		2004. 01. (56歳)
4	2	飯田 泰子	東京都練馬区	2010		
5	3	飯塚 芳郎	神奈川県小田原市	2001		
6	4	飯山 清美	東京都八王子市	2002		
7	5	石井 勉	埼玉県志木市	2006		
8		石見 義夫	広島県呉市	2001	2004	
9	6	石原 浩	京都府長岡京市	2001		
10		石山 忍	兵庫県川西市	2001		2007. 07. (67歳)
11	7	伊藤 敏夫	埼玉県越谷市	2011		
12		伊藤 博	大阪府松原市	2001		2009. 01. (72歳)
13	8	伊藤 博美	東京都三鷹市	2009		
14	9	稲井 敬	兵庫県西宮市	2001		
15	10	稲津 博	東京都品川区	2001		
16		井上喜代太	福岡県北九州市	2001		2005. 06. (96歳)
17	11	今井 方丈	兵庫県神戸市	2010		
18	12	上田 克彦	山口県宇部市	2010		
19		遠藤 俊夫	兵庫県豊中市	2002	2005	
20		遠藤 久勝	宮城県仙台市	2001		2010. 03. (83歳)
21		大竹總一郎	山梨県甲府市	2001	2004	
22		大谷 英尚	東京都中野区	2001		2007. 07. (81歳)
23	13	大塚 昭義	山口県宇部市	2001		
24		大西 信藏	福井県敦賀市	2001	2005	
25		大屋正次郎	埼玉県春日部市	2001		2006. 02. (82歳)
26	14	岡本日出夫	東京都豊島区	2001		
27	15	小川 敬壽	埼玉県鶴ヶ島市	2001		
28	16	小口 宏	長野県安曇野市	2010		
29		奥村彦太郎	愛知県名古屋市	2001	2004	
30	17	奥村 雅彦	大阪府大阪狭山市	2010		
31	18	小倉 佐助	京都府長岡京市	2001		
32	19	雄川 恭行	滋賀県大津市	2001		
33		小田 澄	山口県柳井市	2001	2004	
34	20	小山田 即	福岡県糟屋郡	2001		

35	21	加賀 勇治	山形県山形市	2002		
36	22	垣内 三郎	千葉県千葉市	2003		
37	23	垣鍔 房穂	兵庫県神戸市	2001		
38		勝浦 秀雄	北海道砂川市	2001	2008	
39	24	金尾 啓右	大阪府池田市	2011		
40	25	金山 敬典	徳島県名西郡	2001		
41	26	鹿沼 成美	東京都練馬区	2001		
42		神村 篤	岡山県邑久郡	2002	2004	
43	27	神澤 良明	兵庫県三木市	2007		
44	28	川上 壽昭	愛媛県東温市	2001		
45	29	川村 義彦	埼玉県吉川市	2003		
46	30	神田 幸助	埼玉県所沢市	2001		
47	31	漢那 憲聖	京都府京都市	2010		
48	32	木内 繁夫	宮城県仙台市	2001		
49	33	菊池 務	北海道札幌市	2004		
50	34	喜多村道男	東京都世田谷区	2001		
51		木下富士美	千葉県山武郡	2004	2010	
52		木村 千明	愛知県名古屋市	2001		2010.01. (69歳)
53	35	草山 泰子	大阪府大阪市	2005		
54	36	久住 佳三	大阪府寝屋川市	2001		
55	37	倉西 誠	富山県富山市	2002		
56	38	厚東 正之	京都府京都市	2001		
57		國井 立志	兵庫県神戸市	2002	2004	
58	39	後藤 正季	大阪府高槻市	2001		
59	40	小松 明夫	島根県出雲市	2010		
60	41	小水 満	滋賀県近江八幡市	2009		
61		小山 一郎	群馬県前橋市	2001	2011	
62	42	齊藤 一彦	静岡県浜松市	2001		
63	43	酒井 尚信	静岡県静岡市	2001		
64		坂ノ上信美	東京都八王子市	2003	2006	
65	44	佐々木正寿	宮城県名取市	2006		
66	45	佐藤 孝司	大阪府大阪市	2001		
67		佐藤 伸雄	東京都板橋区	2001	2006	
68		篠田 俊治	静岡県浜松市	2003	2009	
69	46	柴田 崇行	北海道札幌市	2001		
70	47	柴田英三郎	神奈川県横浜市	2001		
71		柴山 孝行	愛知県一宮市	2001	2009	
72		島田 裕弘	石川県金沢市	2001	2011	

73	48	清水 久子	京都府京都市	2001		
74	49	四宮 恵次	神奈川県平塚市	2001		
75		志村 元久	東京都練馬区	2004	2010	
76	50	下野 哲勇	鹿児島県鹿児島市	2001		
77		鈴木 穂	新潟県岩船郡	2001	2004	
78	51	砂屋敷 忠	広島県広島市	2001		
79		須山 正一	島根県竹簸川郡	2001		2010.11 (90歳)
80	52	高尾 義人	長崎県長崎市	2001		
81	53	高橋 司伸	島根県出雲市	2010		
82		高本雄一朗	京都府京都市	2001		2002.11 (86歳)
83	54	段床 嘉晴	大阪府摂津市	2001		
84	55	津田 元久	神奈川県厚木市	2001		
85	56	筒井 政光	大阪府茨木市	2004		
86	57	鶴田 重彦	埼玉県久喜市	2001		
87	58	土井 邦雄	群馬県前橋市	2006		
88	59	遠山 坦彦	神奈川県相模原市	2001		
89		豊浦 久明	宮崎県宮崎市	2001	2009	
90		長岡 新六	埼玉県所沢市	2001		2009.3 (76歳)
91	60	長澤 弘	新潟県新潟市	2001		
92	61	中間 光雄	北海道札幌市	2001		
93		中村 修	茨城県日立市	2001	2009	
94		中村 純雄	鹿児島県鹿児島市	2001	2010	
95	62	中村 幸夫	大阪府池田市	2009		
96	63	西村 信男	京都府宇治市	2001		
97	64	野原 弘基	京都府京都市	2001		
98	65	萩原 明	神奈川県横浜市	2001		
99	66	萩原 康司	北海道札幌市	2001		
100	67	橋本 宏	東京都北区	2001		
101	68	服部 繁	愛知県名古屋市	2002		
102	69	花山 正行	大阪府寝屋川市	2010		
103	70	速水 昭雄	千葉県鴨川市	2001		
104		日浦 康雄	奈良県奈良市	2001	2005	
105		姫野 全象	福岡県北九州市	2001	2005	
106	71	平林 久枝	東京都小金井市	2001		
107	72	福西 勝司	大阪府高槻市	2002		
108	73	藤田 卓造	愛知県春日井市	2009		
109	74	藤田 透	京都府京都市	2007		
110	75	堀田 勝平	岐阜県多治見市	2009		

111	76	前越 久	愛知県名古屋市	2001		
112	77	前田 幸一	東京都墨田区	2002		
113		牧野 純夫	神奈川県横浜市	2003	2008	
114	78	松井 美樞	東京都八王子市	2001		
115		松浦 浩	愛知県名古屋市	2001	2004	
116		松田 秀治	神奈川県横浜市	2001	2004	
117	79	松田 義勝	北海道小樽市	2001		
118	80	松谷 一雄	埼玉県入間市	2001		
119		松本 健	東京都練馬区	2001		2006.11 (73歳)
120	81	松本 進	埼玉県蕨市	2006		
121	82	丸山 静雄	長野県安曇野市	2001		
122		丸山 米三	兵庫県神戸市	2001	2007	
123	83	三代 忠	栃木県小山市	2001		
124	84	宮高 瞳	京都府京都市	2009		
125	85	宮地 利明	石川県金沢市	2010		
126	86	森 克彦	埼玉県川越市	2002		
127	87	森 信一	京都府京都市	2001		
128		森 嘉信	兵庫県宝塚市	2001		2002.2 (67歳)
129	88	八木 浩史	徳島県徳島市	2010		
130	89	矢野善四郎	奈良県奈良市	2007		
131	90	山 哲男	京都府京都市	2001		
132	91	山岸 一雄	茨城県古河市	2001		
133	92	山下 緑	千葉県船橋市	2001		
134	93	山田 和美	千葉県流山市	2001		
135	94	山田 勝彦	京都府亀岡市	2001		
136		山本喜代志	石川県金沢市	2001	2009	
137	95	山本 英明	埼玉県南埼玉郡	2005		
138	96	山本 義憲	兵庫県西宮市	2001		
139	97	吉田 弘	京都府京都市	2001		
140		吉富 元康	大阪府茨木市	2001	2010	
141	98	若松 孝司	大阪府茨木市	2001		

注：① 赤字は名誉会員

② ご逝去会員

③ 名簿の詳細は、毎年9月頃発行の会員名簿を参照下さい。

3.5 FAR会 規約

(名称および事務局)

第1条 この会は、FAR会 (Fellowship for The Advancement of Radiology) といい、事務局を日本放射線技術学会（以下 JSRT という）事務局内に置く。

(目的)

第2条 この会は、会員の親睦を図ることを旨とし、併せて JSRT の発展を支援する。

(事業)

第3条 この会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 情報誌などを通じて会員への情報提供
- (2) 交流会、懇親会など、会員親睦会の開催
- (3) 会員名簿の発行
- (4) 会員動静ならびに、この会に必要な JSRT 情報などの収集
- (5) 学術大会における会員への宿泊斡旋
- (6) 会員の同好を活かすための交流支援
- (7) その他役員会で定めた事業

(会員)

第4条 この会の会員は、会の目的ならびに規約に賛同し、年会費を納めた次の者とする。

「正会員」

- (1) JSRT の会員あるいは元会員で、過去あるいは現在において JSRT の会長、理事、監事、委員長、分科会長、部会長あるいは大会長、大会実行委員長の経験のある 60 歳以上の者
- (2) JSRT の会員あるいは元会員で、三賞の受賞経緯あるいは宿題報告またはシンポジウム座長経験のある 60 歳以上の者
- (3) JSRT の永年功労会員
- (4) JSRT の事務局職員あるいは元事務局職員で、60 歳以上の者
- (5) その他、本会会員の推薦により役員会で承認された者

「名誉会員」

正会員であって、米寿（数え歳 88 歳）を過ぎ者で、終身とする。

(会員の扱いと義務)

第5条 この会の会員は、年齢、性別、経歴など、過去・現在の如何なる事項に關係なく、同等の扱いを受ける。

2. 年会費は前納とし、原則として会計年度開始後 10 ヶ月以内に当該年度の会費が納入されない場合は、自動的に退会扱いとなる。

3. 名誉会員の年会費は免除とする。ただし、委嘱日（毎年 1 月 1 日）現在における前納会費は原則として返却しない。

(会費ならびに使途)

第6条 会員の会費は、年間 2,000 円とする。なお多年度（出来れば 3 年以上）の会費前納が望ましい。

2. 会費の使途は、原則として会員への連絡通信費用、名簿作成費、情報誌などの作成費ならびに「FAR 会の運営に関する細則」に定めるもののみとし、会員への慶弔費は含まないものとする。なお、使途の枠組みは役員会に委ねる。

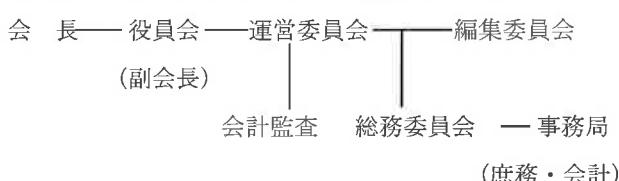
(入退会)

第7条 新たに会員になろうとする者は、年会費を添えて所定の入会事項を事務局に届けなければならない。

2. 退会しようとする者は、その旨を事務局に届けなければならない。なお、途中退会の前納会費は原則として返却しない。

(運営組織)

第8条 本会の運営組織は次による。なお会の具体的な運営は、別に定める細則による。



(世話人ならびに役員・委員の選任)

第9条 この会に 25 名以内の世話人を置き、役員会を構成する。任期を 2 年とし、再任を妨げない。

2. 世話人の内より、会長 1 名、副会長 2~3 名、庶務・会計 1 名、会計監査 1 名を選任する。

3. 会長の選任は世話人の互選とし、副会長、庶務・会計、会計監査は会長が指名する。

4. 各委員会の長は世話人の互選とし、委員は各委員長が選任して運営委員会の承認を得る。

(会議と運営)

第10条 役員会は JSRT 事務局の支援を受けて、当会事業のすべての企画、運営に当る。なお、役員会は書面、メールなどの通信手段を使って意思決定を行うこともできる。

2. 役員会は原則として年 2 回、春・秋の JSRT 学術大会時期に開催し、総会学術大会時の役員会を通常総会と位置付ける。

3. 会長は会員に対し、年 1 回以上は会の現況等、必要事項を報告しなければならない。

4. 役員は無報酬とし、その活動費用は、別に定める細則に定めるもの以外はすべて自己負担とする。

(資産、運営経費)

第11条 この会の資産、運営経費は次の通りとする。

(1) 年会費

(2) 事業に伴う受益者負担金

(3) 寄付金品、協賛金、広告料など

(4) その他の収入

(会計年度)

第12条 この会の会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり翌年 3 月末日で終る。

(規約の発効と改訂)

第13条 この規約は、平成 13 年 4 月 5 日より発効する。

2. この規約は、役員会の承認を得て改訂することが出来る。

3. この規約施行についての細則は、役員会の承認を得て別に定めることが出来る。

* 規約の最終改訂：平成 23 年 4 月 1 日施行

FAR 会の運営に関する細則 (1) 具体的事項

1. 運営の基本

- ・世話人ならびに役員・委員への通信手段は、相互の通信を含め e-mail を原則とする。ただし受信者は何等かの形で着信、開封信号を発しなければならない。

2. 役員会

- ・役員会は、年 2 回、春・秋の JSRT 学術大会の開催に合わせて開催する。
- ・役員会は、事業報告、収支報告、事業計画、収支予算ならびに世話人・役員の選任、規約・細則の改訂などの重要案件を審議、決定する

3. 運営委員会

- ・運営委員会は、会長又は会長より委任された副会長 1 名以上、編集、総務委員会を代表する者 1 名以上 3 名以内、ならびに事務局を代表する者 2 名以内の出席をもって成立する。
- ・運営委員会は、年 2 回、原則として春・秋役員会の中間月に開催する。
- ・運営委員会の審議案件は、年度事業計画、予算案の立案を含め、春の役員会で審議決定された、事業計画、収支予算などの進捗状況に関する案件のほか、役員会へ提案する重要案件の事前検討に重点を置く。

3.1 編集委員会

- ・編集委員会は、規約第3条（1）の情報誌の編集・発行の責任を持つ。
- ・編集委員会の業務は、原則として年3号の情報誌発行を企画し、総務委員会と連携して会員に対する会の現況報告。会員への原稿募集を含めた各号の具体的な編集作業、事務局との連動などを行う。
- ・編集委員長は、各号の編集のために編集責任者を都度指名することが出来る。

3.2 総務委員会

- ・総務委員会は、規約第10条（会議と運営）に定める如く、JSRT事務局の支援と編集委員会と連動して、役員会、運営委員会などの運営を含め当会事業のすべての企画、進行に当る。
- ・総務委員会は、規約第3条（2）の交流会、懇親会など、会員親睦会の開催企画（担当世話人の推薦）の立案、推進を主体として、FAR会の活性化のための諸企画を立案、推進する。更に、会員懇親会など、本会の重

要業務の集約、顛末報告を担当する。

- ・総務委員会は、JSRT総務委員会と連動して本会の広報に努めると共に、事務局長ならびに庶務・会計担当からの情報を定期的に入手・把握し、必要により情報誌に掲載する情報の責務を持つ。

4. 事務局

- ・本会の庶務・会計業務は、JSRT事務局に委託する。
- ・事務局の業務は、会員現況の把握、会の資産管理、会費納入に関する事項、情報誌・会員名簿などの印刷、発送、新入会員の勧誘事務、本会資料・記録の保存、その他、役員会あるいは運営委員会で定められた庶務・事務的事項のすべてを含むものとする。

5. 担務

この細則に関する事項の担務は、総務委員長とする。

* 細則の施行：平成21年10月

FAR会の運営に関する細則（2）経費処理

1. 適用範囲

この細則は、規約第6条（会費ならびに使途）

- 2. ならびに第10条（会議と運営）5. に従い、「FAR会の運営に関する細則（その1具体的な事項）」の運用に連動して適用する。

2. 役員会の経費

- ・役員会に関する経費は、役員の参加費を含めすべて自己負担とする。ただし、開催時間の関係から食事を必要とする場合は、会より現物あるいは相当額を提供する。

3. 運営委員会の経費

- ・運営委員会に参加する経費は、参加者の現住地近隣のJR駅より会議開催地近隣のJR駅間

の乗車券代と特急券代の実費のみを支給し、その他の費用は支給しない。

- ・前項の実費は参加者の自己申告とし、会議開催10日以前に所定の様式に記載のうえ、総務委員長にメール申告する。
- ・1会議、出席1名当たり1,000円を食事代として支給する。なお、会議に宿泊を要する場合でも、宿泊代は自己負担とする。

3.1 編集委員会

- ・各号の編集のための費用として、編集諸掛として1号当たり10,000円を編集委員長に支給するがその按分は編集委員長に委ねる。

3.2 総務委員会

- ・委員会業務の遂行のため、JSRT 事務局への交通費は、本人から委員長への申請に基づき実費を支給する。
- ・本会の広報に関する費用は、事務局費用の該当科目にて充当する。
- ・会員懇親会の集約、顛末のための費用は、懇親会支出費中に包含するものとする。
- ・その他の経費は、すべて自己負担とする。

4. 事務局の経費

- ・本会事務局の経費は、事務用品費、会員への連絡通信費用、名簿作成費、情報誌などの作成費などを含め、事務局業務の運営のためのすべてを含むものとする。

5. 担 務

この細則に関する事項の担務は、総務委員長とする。

* 細則の施行：平成 21 年 10 月

祝 FAR 会 10 周年 記念事業協賛募金ご芳名 (50 音順)

飯田 泰子	飯塚 芳郎	石井 勉
石原 浩	伊藤 敏夫	伊藤 博美
稻井 敬	稻津 博	大塚 昭義
岡本日出夫	小川 敬壽	雄川 恭行
小倉 佐助	小山田 即	加賀 勇治
垣鍔 房穂	金尾 啓右	金山 敬典
鹿沼 成美	神澤 良明	川上 壽昭
川村 義彦	木内 繁夫	喜多村道男
草山 泰子	久住 佳三	倉西 誠
厚東 正之	後藤 正季	小水 満
佐々木正寿	佐藤 孝司	柴田 崇行
清水 久子	四宮 恵次	砂屋敷 忠
高尾 義人	段床 嘉晴	筒井 政光
鶴田 重彦	土井 邦雄	遠山 坦彦
長澤 弘	中間 光雄	野原 弘基
萩原 明	橋本 宏	服部 繁
速水 昭雄	平林 久枝	福西 勝司
藤田 卓造	藤田 透	前越 久
前田 幸一	松田 義勝	丸山 静雄
三代 忠	森 克彦	八木 浩史
山 哲男	山岸 一雄	山田 和美
山田 勝彦	山本 義憲	

祝 FAR 会 10 周年 記念事業協賛広告 (50 音順)

株式会社 医 療 科 学 社

代表取締役社長 古屋敷 信一

(取扱業務：医学書の出版)

オ リ オ ン 電 機 株 式 会 社

代表取締役社長 本間 龍夫

(取扱業務：放射線関連用品の製造、販売)

コ ニ カ ミ ノ ル タ ヘ ル ス ケ ア 株 式 会 社

代表取締役社長 野崎 憲治

(取扱業務：医療用画像機器の商品企画・販売)

島 津 メ デ ィ カ ル シ ス テ ム ズ 株 式 会 社

代表取締役社長 中西 康彦

(取扱業務：医療機器の販売および据付、修理、保守点検)

東 和 放 射 線 防 護 設 備 株 式 会 社

代表取締役社長 筒井 政光

(取扱業務：放射線防護設備の設計、施工)

ト ー レ ッ ク 株 式 会 社

代表取締役社長 佐藤 光悦

(取扱業務：放射線精密機器の製造、販売)

日 興 フ ア イ ン ズ 工 業 株 式 会 社

代表取締役社長 金田 慎爾

(取扱業務：放射線機器、関連用品の製造、販売)

日 本 メ ジ フ ィ ジ ク ス 株 式 会 社

代表取締役社長 三上 信可

(取扱業務：放射性医薬品の製造、販売)

堀 井 藥 品 工 業 株 式 会 社

代表取締役社長 堀井 正憲

(取扱業務：医薬品の製造、販売)

株 式 会 社 マ イ ダ

代表取締役社長 前田 幸一

(取扱業務：X線防護用具の製造、販売)

三 田 屋 商 事 株 式 会 社

代表取締役社長 飯田 泰子

(取扱業務：放射線精密機器の製造、販売)

10周年記念事業を終えて（お礼）

10年間の会の経緯や足跡を中心に纏めておくことが“FAR会の歴史を振り返るときに正式記録として役立つもの”との考えが平成23年1月に話題となり、この度の記念誌構想がスタートした。しかしFAR会10年間の正式記録となると、誤ってはならないという責任を強く感じた次第です。

例えば「第三章 3.4 会員名簿」を見ると、10年間の延べ会員数は141名であり、23年5月末の会員が98名であることから、10年間に何らかのご事情により退会された会員が43名おられることとなります。

しかし、この中には14名の方々が会員在籍中にご逝去された方であり、ここに皆様と共にご冥福をお祈り申し上げます。

振り返って、記念事業の企画から完了に至る経緯を見ると「FAR会のシンボルマークの制定」と「10周年記念誌の作成」が4月9日の役員会で承認され、具体的な作業が開始されました。「シンボルマーク関連」記事につきましては、本誌4頁記載に譲ることとし「10周年記念誌」は、会員ならびに関係する皆さんのが支援とご協力を頂くことにより「手作りの記念誌」として完成することが出来まして、ここに皆さんのお手元にご披露する運びとなりました。

完成した記念誌について必要なところを整理してみますと、

- ・ご挨拶関係

橋本FAR会会長のご挨拶、真田JSRT代表理事の祝辞、山田FAR会副会長の記念事業に関するご挨拶を頂きました。

- ・第一章 FAR会10年の歩み

10年間のFAR会活動を振り返って、（総括）四宮副会長、（懇親活動）川上副会長、（情報誌の編集）山田編集委員長に纏めて頂きました。

- ・第二章 この10年間 心に残る想い出

10年間のFAR会活動の中で、中心的に活躍頂いた30名の会員に投稿をお願いしまして、19名の方から個性豊かな原稿を頂くことが出来ました。有難うございました。内容的には当初予想していた懇親会活動に関わる原稿が少なく、東日本大震災や幅広い内容が含まれ、皆さんのが思い出となっていることが良く判ります。そこで懇親会活動紹介を補填する意味で「情報誌、記念誌で余りお目に掛けなかった写真を中心に「懐かしの写真集」として加筆させて頂きました。

- ・第三章 FAR会10年間の記録

一番大変な根気のいる仕事で、特に四宮恵次先生、清水久子さんの強力なサポート、ならびにJSRT宮高事務局長はじめ事務局の皆さんのが協力無しでは出来なかった記録です。

- ・協賛募金、協賛広告について

協賛募金は、65名（246.5口）の募金を頂きました。そして協賛広告につきましても、11社（22口）の広告掲載を行うことが出来ました。有り難うございました。この募金、広告料につきましては平成23年度決算報告の中で監査受検後に御報告申し上げます。

本来ならば、記念事業の企画から完了に至る皆様方のご芳名を記載し、御礼の言葉と致すべきと思いますが紙面の関係で省略させていただきました。お詫び申し上げ、感謝の気持とさせていただきます。

最後に、10周年記念事業の内、記念誌の出版に当たっては山田勝彦・川上壽昭・四宮恵次先生はじめ記念事業世話人の方々のご努力で可能であった事、とくに四宮恵次先生の献身的なご努力の賜物であったことを記し、深甚より感謝申し上げます。ことに、JSRT事務局の皆様方には印刷、製本、発送など記念誌出版全般にわたり全面的なご協力を頂き有難うございました。またFAR会総務委員の方々、ことに清水久子氏の献身的なサポートを頂きました。ここに名前を記して感謝申し上げます。

なお、記念事業世話人の方々は下記の通りです。

記念事業世話人：山田勝彦（代表世話人）、川上壽昭、四宮恵次、山田和美、前越 久、神澤良明、藤田 透、
宮高 瞳、山 哲男

平成23年10月

総務委員長 山 哲男

FAR 会設立 10 周年記念誌

(非売品)

発行日：平成 23 年 10 月

発行責任者：橋本 宏

編集責任者：山田 勝彦

F A R 会

(Fellowship for the Advancement of Radiology)

事務局：公益社団法人 日本放射線技術学会内

〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入東銭屋町 167 ビューフォート五条烏丸 3F

TEL : 075-354-8989 FAX : 075-352-2556 <http://www.jsrt.or.jp>

FAR 会のご案内

FAR 会 HP : JSRT の HP (<http://www.jsrt.or.jp>) → 学会の活動 → FAR 会

FAR 会会員マーリングリスト : farkaim1@sml.infoseek.co.jp